第７回　防災ボランティア活動検討会
分科会１資料

議事次第

資料１　分科会１　検討項目（案）

資料２　内閣府「平成１９年度災害ボランティア活動の安全衛生に関する調査」

資料３　ボランティア安全衛生フォーラム実行委員会
「災害ボランティア活動目からウロコ？の安全プチガイド」

資料４　ボランティア安全衛生フォーラム実行委員会
「ボランティア安全衛生フォーラム　報告書」

資料５　国土交通省「除雪ボランティアの安全衛生に関する調査　報告書」

平成１９年８月２６日

第７回「防災ボランティア活動検討会」

分科会１「防災ボランティアの安全衛生について」

議 事 次 第

平成１９年８月２６日（日）１４：００～１５：２０

１．第６回検討会以降における部会の活動（検討）成果の報告
（14：00～14：10）

２．能登半島地震、新潟県中越沖地震に関連する話題提供、意見交換
（14：10～14：40）

３．情報・ヒント集の改訂に関する意見交換
（14：40～15：00）

４．第６回検討会以降における部会の活動（検討）成果を受けての意見交換
および、第７回検討会以降の部会の活動（検討）の方向性に関して意見交換
（15：00～15：20）

資料１

分科会１　検討項目（案）

○ 国土交通省「除雪ボランティア活動の安全衛生に関する調査」

○ ボランティア安全衛生フォーラム実行委員会主催「ボランティア安全衛生フォーラム」

○ ボランティア安全衛生フォーラム実行委員会作成「災害ボランティア活動目からウロコ？の安全プチガイド」

○ 内閣府「平成１９年度災害ボランティア活動の安全衛生に関する調査」

○ 能登半島地震、新潟県中越沖地震災害関係

○ 防災ボランティア活動に関する情報・ヒント集の改訂
- 安全衛生編
- 寒冷環境下における防災ボランティア活動に関する情報・ヒント集（素案）

○ 内閣府「災害ボランティア活動の安全衛生に関する調査」のヒアリングの内容および 19 年度実施の災害ボランティアセンターアンケート（地震災害含む）の項目等

○ 被災地で活動するボランティアの作業風景画像、映像の募集

○ 今後の成果物の作成および報告について（内容、形式、時期等）

○ 防災ボランティアの安全衛生に関するその他の課題

資料２

平成１９年８月６日

平成１９年度

災害ボランティア活動の安全衛生に関する調査

もくじ

１．安全衛生に関わる資機材・物資について 1

（１）調達した資機材・物資と調達先 1

（２）調達のきっかけ 3

（３）調達の際困ったこと等 4

２．ボランティア活動の安全衛生に関する配慮 6

（１）ケガ・疾病の予防、健康管理について 6

（２）周知のための対策 11

３．ケガ、疾病の実例等 12

（１）ケガ・疾病の実例の有無 12

（２）専門家への相談 13

４．その他 15

（１）自由回答一覧 15

内閣府は、平成１７・１８年度設置された災害ボランティアセンターを対象に災害ボランティア活動の安全衛生に関する対応等について、その現状把握や課題を把握するために、アンケート調査を実施した。

実施期間　平成 19 年 6 月 6 日～6 月 15 日

対　　象　平成 17・18 年度風水害によって設置された災害ボランティアセンター[1]

調査方法　災害ボランティアセンターの設置・運営に関わった県・市・町社会福祉協議会へのアンケート（全国社会福祉協議会の協力を得る）、FAX および郵送による回収

回　　収　36 センター中 30 センター（８３％）

[1] 平成１７・１８年度に設置された災害ボランティアセンターを対象にしたアンケート調査 http://bousai-vol.jp/hint/index.html で公開

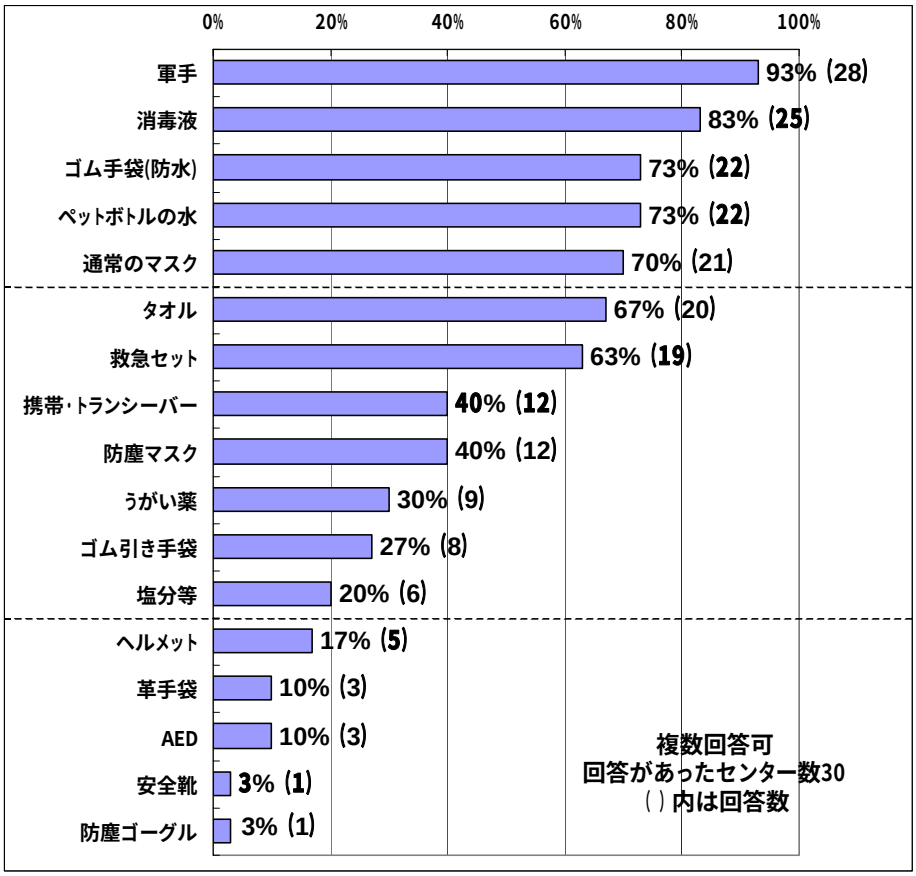
１．安全衛生に関わる資機材・物資について

（１）調達した資機材・物資と調達先

設問

問１－１　災害ボランティアセンター（以下、「センター」と呼ぶ）等で準備した用品につき、回答欄に○を入れ、その大まかな数量と、主な調達先をお答えください。調達先については、「備蓄済み」「(・・・・）から受領」「地元商店から購入」等とお書きください。

■図１　準備した安全衛生に関わる資機材・物資



①準備する割合が多かった資機材・物資

９割台　　「軍手」
８割台　　「消毒液」
７割台　　「ゴム手袋（防水)」「ペットボトルの水」「通常のマスク」

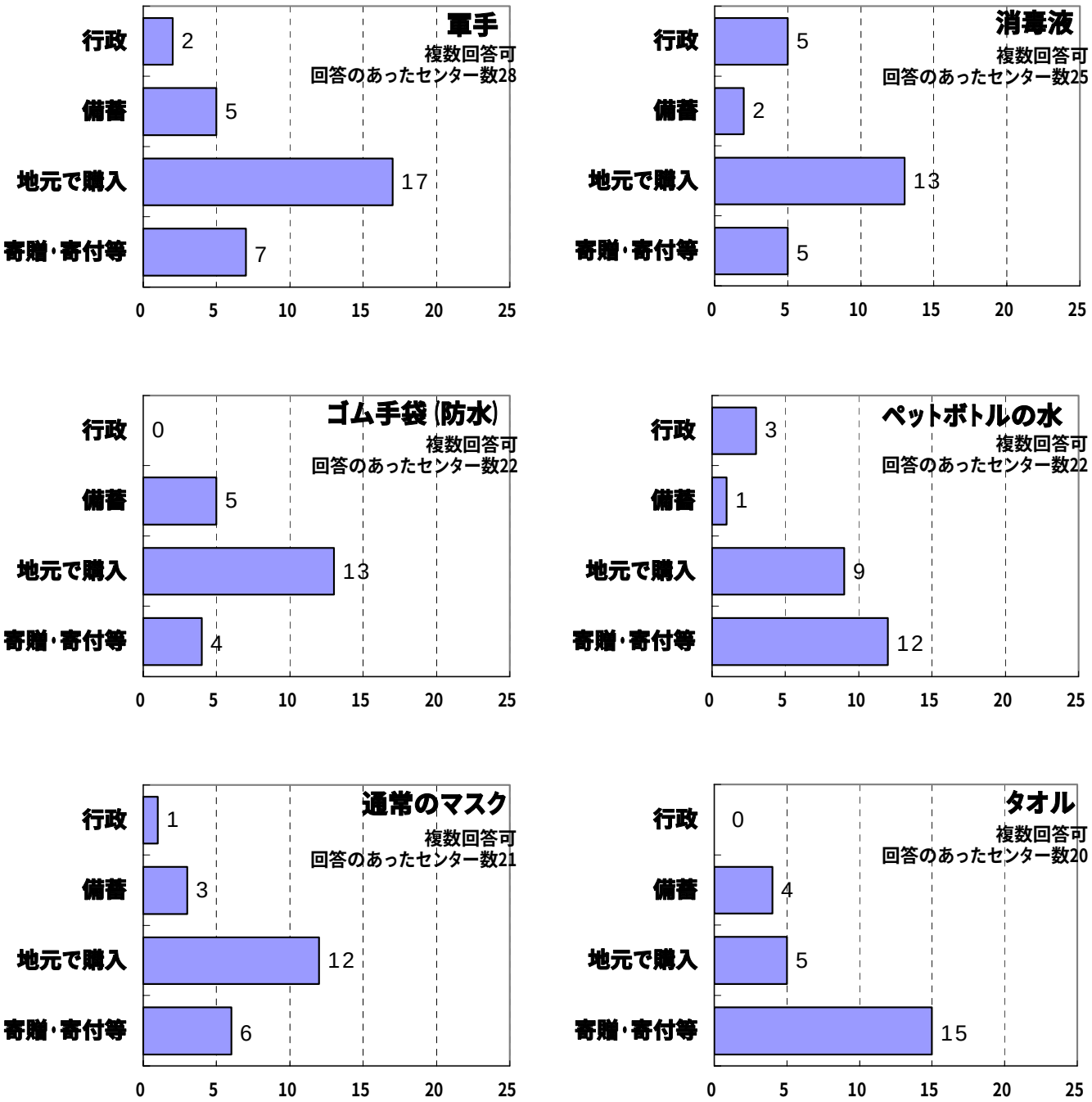
②準備する割合が低かった資機材・物資

２割以下　　「防塵ゴーグル」「安全靴」「ＡＥＤ」「革手袋」「ヘルメット」

③自由回答

「日用品セット」　「トイレットペーパー」　「消毒用石けん」
「ハロゲンライト三脚付き」　「照明器具」　「インバーター発電機」
「ごみ袋」　「ビニールシート」　「梅干、飴」
「石灰」　「スリッパ」

■図２　安全衛生に関わる資機材・物資の調達先



過半数以上のセンターで準備した安全衛生に関する資機材・物資（６種類）の調達先としては、地元で購入した割合がやや多い傾向にある。つまり、災害発生後に調達したものであり、それに比べ、事前に備蓄している割合は少ない。

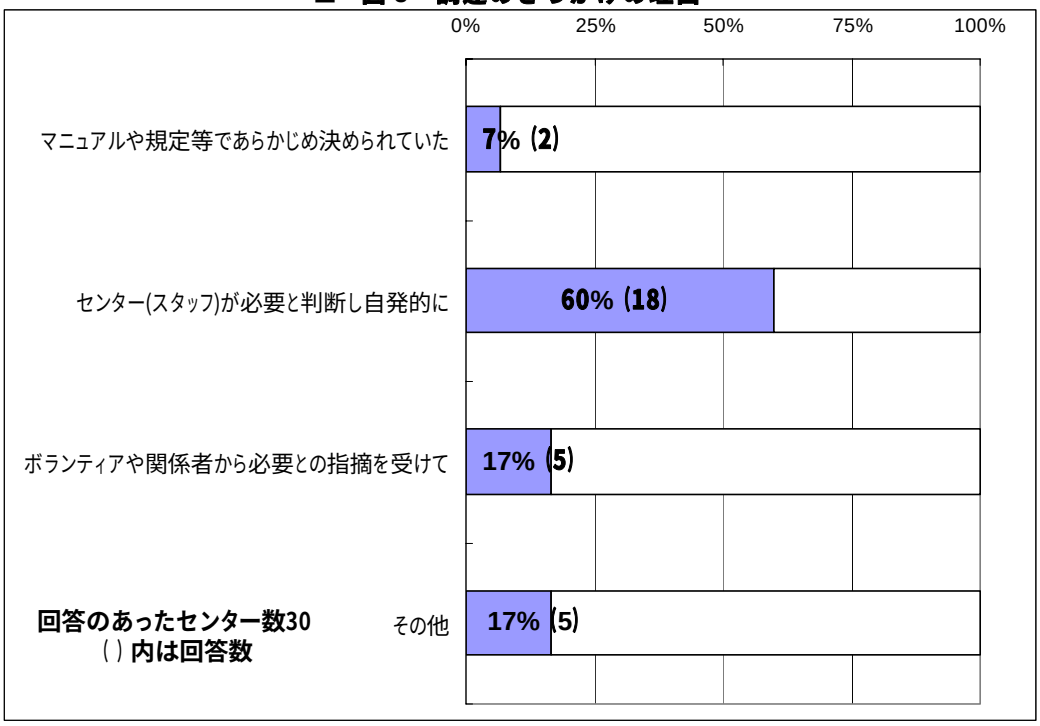
その他は、企業からの寄贈や支援物資、救援物資として入手したものであった。

（２）調達のきっかけ

設問

問１－２　調達したきっかけはどのようなものですか。(①～④のいずれかの回答欄に○を入れて下さい。)

■　図３　調達のきっかけの理由



回答のあった約過半数のセンターで、センター（スタッフ）が必要と判断し、自発的に資機材・物資を調達した。

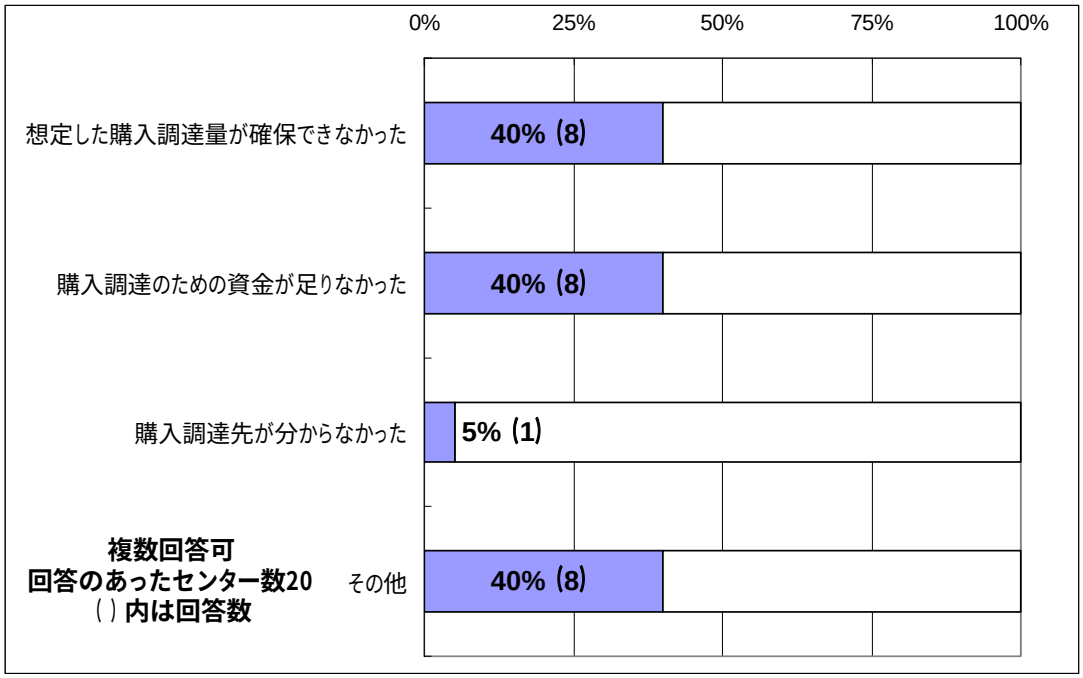
ボランティアや関係者から必要との指摘を受けた例や、マニュアルや規定で決められている例は全体の２割に満たない。

（３）調達の際困ったこと等

設問

問１－３　調達の際に困ったこと（複数回答可。①～④の回答欄に○を入れて下さい。）

■　図４　調達時に困ったこと



回答したセンターの４割が、想定した購入調達量が確保できなかった。また、購入調達のための資金が足りなかった。

「その他」の自由回答は下記の通り。

- 大規模災害や調達数量が足りなくなることを考えると、備蓄が必要と思うが数量の読みが分からない。
- 防塵マスクについてはあまり性能が良すぎると息苦しくて、現場で外すボランティアが多かったので、値段との兼ね合いもあり銘柄を選ぶのに苦労した。
- 初めてのことで何をどの程度調達したらいいのか分からなかった。
- 想定していたボランティア数を大幅に超えた為、用品の調達を数回行った。
- 調達する数量を想定できなかった。
- 特に困っていない。（２）

設問

問１－４　資金があれば調達したかったものは何でしょうか。（自由回答）

自由回答の一覧は下記の通り。（　）内はコメントの数。

- 高圧洗浄機（４）
- 防塵マスク（２）
- ゴム手袋(３)
- 革手袋
- ヘルメット
- 安全靴、長靴
- 土のう袋
- 消毒液等、備蓄済み以外の医薬品、救急箱
- 軽トラックに積む給水用品、ペットボトルの水
- 製氷機（強力なもの)、冷蔵庫
- 軽トラック、一輪車
- トランシーバー
- 緊急連絡用の携帯電話（２）
- ファックス

設問

問１－５　その他､ボランティアセンターの安全衛生のために必要な用品等があればお書きください。（自由回答）

自由回答の一覧は下記の通り。

- 厚手のゴム手袋
- 土のう袋、一輪車
- 高圧洗浄機
- 手洗い・うがい用の水、飲み水を保存する袋･入れ物
- 水道設備
- 仮設トイレ
- 消毒液、うがい薬（紙コップを含む）
- 寝具（圧縮タイプ）
- 虫除けスプレー
- スポーツ飲料

２．ボランティア活動の安全衛生に関する配慮

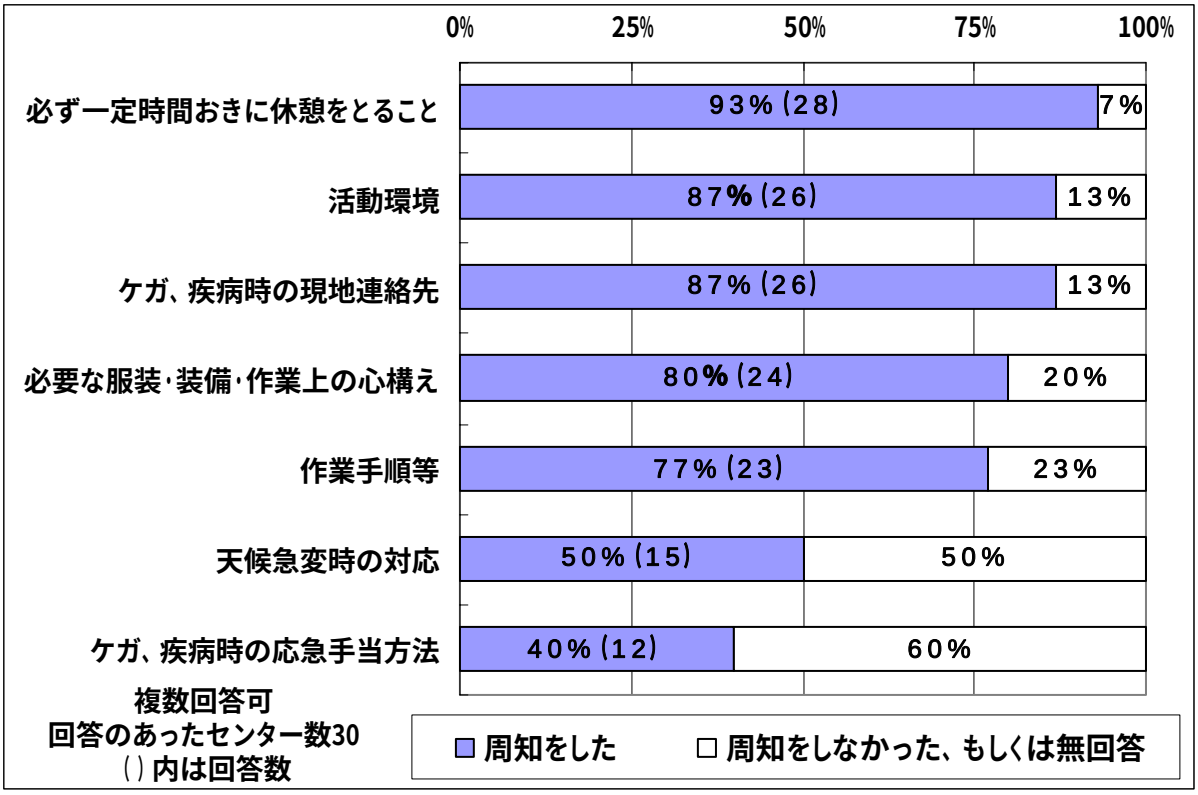
（１）ケガ・疾病の予防、健康管理について

設問

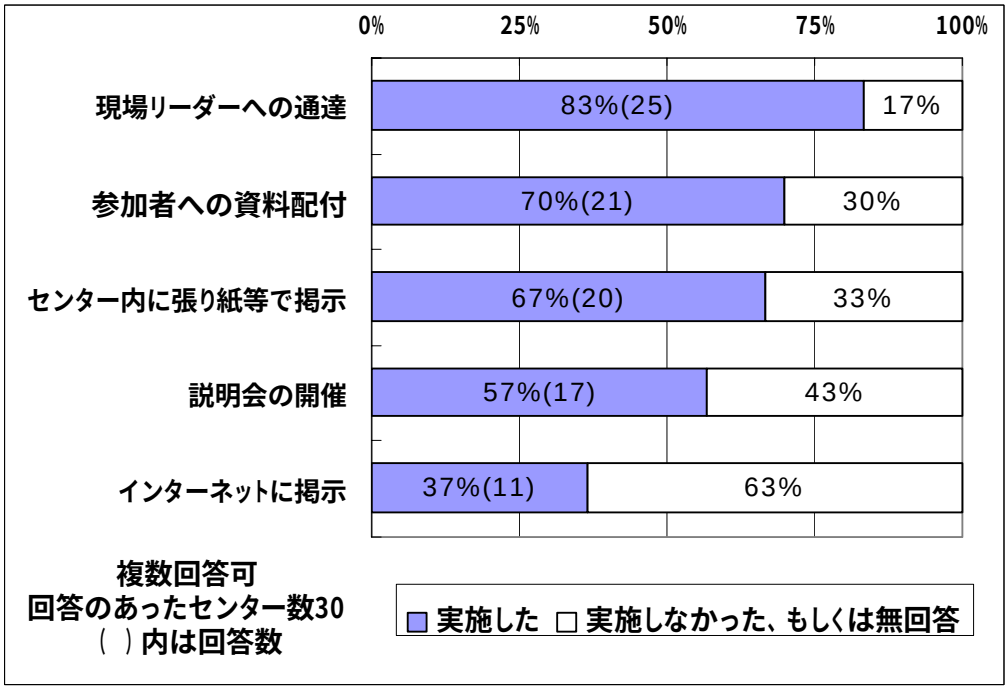
問２－１　災害ボランティア活動時のケガ・疾病予防や健康管理方法についての工夫をしたことがあれば、具体的な周知方法を下記の選択肢（Ｘ、Ａ～Ｅ）から該当する全てを回答欄にお書き下さい。（複数回答可）

X	特に周知のための手当はしなかった		
A	センター内に張り紙等で掲示	B	紙にして参加者に資料配付
C	説明会を開催	D	現場リーダーに通達
E	インターネットに掲示		

■図５　ケガ・疾病の予防・健康管理の実施の有無



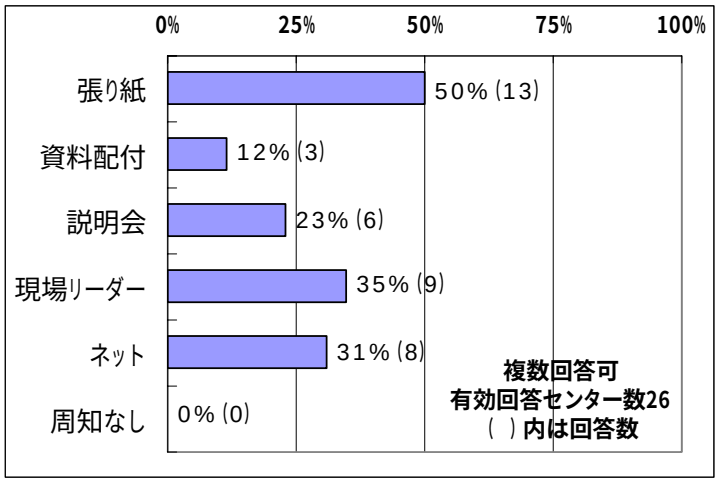
■　図６　ケガ・疾病の予防・健康管理方法に関する周知の有無



・　「現場リーダーへの通達」が一番多く、現場での対応を優先する傾向がある。
・　ついで「センター内に張り紙等で掲示」「参加者への資料配付」「説明会の開催」等センター内で事前に呼びかける方法が多い。また、インターネットに掲示した例は４割程度であった。

①活動環境（被災地の被害状況・天候等）

■図７　活動環境（被災地の被害状況・天候等）に関する周知方法

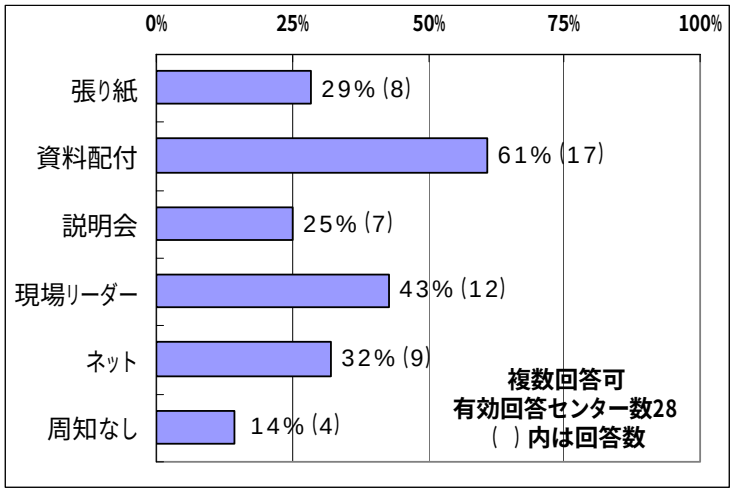


【凡例】
張り紙　　：センター内に張り紙等で掲示
資料配付：参加者への資料配付
説明会　　：説明会の開催
現場リーダー：現場リーダーへの通達
ネット　　：インターネットに掲示

・　センター内に張り紙等で掲示した例が一番多く、ついで現場リーダーへの通達例が多い。

②必要な服装・装備・作業上の心構え

■図８　必要な服装・装備・作業上の心構えに関する周知方法

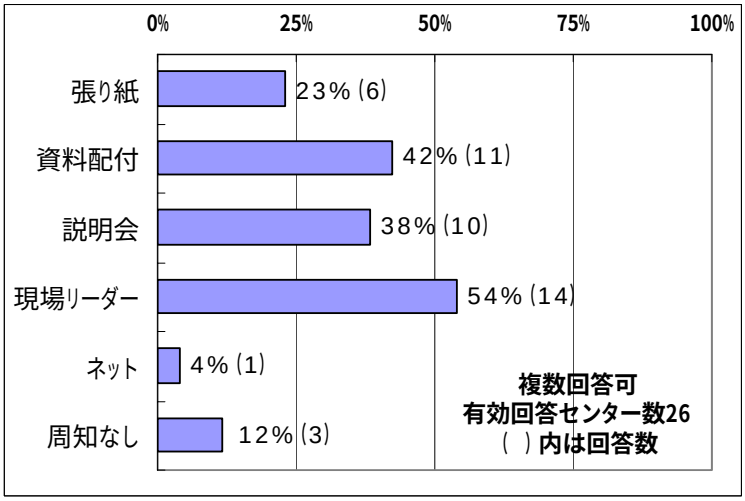


【凡例】
張り紙　　：センター内に張り紙等で掲示
資料配付：参加者への資料配付
説明会　　：説明会の開催
現場リーダー：現場リーダーへの通達
ネット　　：インターネットに掲示

・　参加者への配付例が多く、ついで、現場リーダーへの通達例が多い。
・　インターネットに掲示し、できるだけ事前周知を図ろうとしたと思われる例も全体の３割程度ある。

③作業手順等

■　図９　作業手順等に関する周知方法

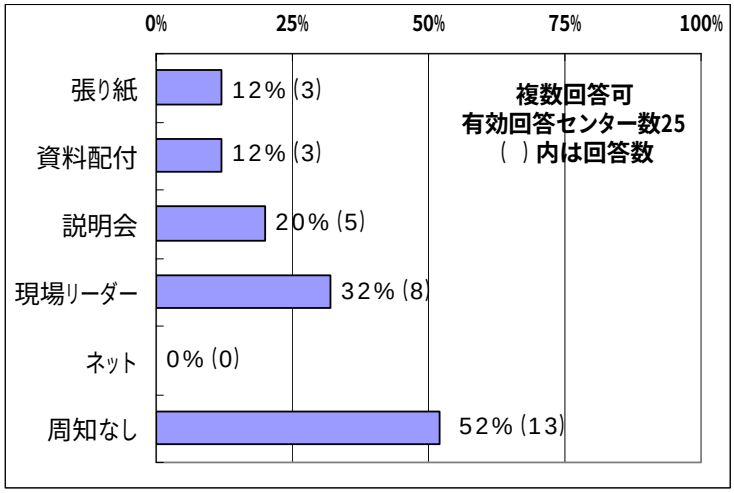


【凡例】
張り紙　　：センター内に張り紙等で掲示
資料配付：参加者への資料配付
説明会　　：説明会の開催
現場リーダー：現場リーダーへの通達
ネット　　：インターネットに掲示

・　作業手順等については現場リーダーへの通達例が半数を占め、ついで参加者への資料配付が多い。

④ケガ、疾病時の応急手当法

■　図 10　ケガ、疾病時の応急手当方法に関する周知方法

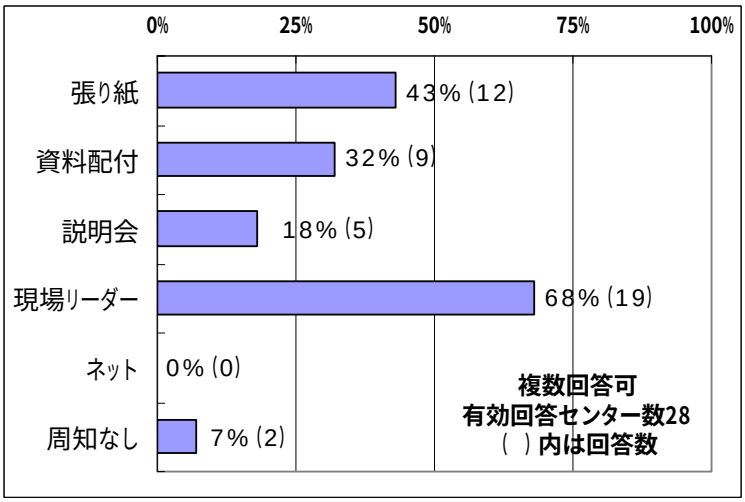


【凡例】
張り紙　　：センター内に張り紙等で掲示
資料配付：参加者への資料配付
説明会　　：説明会の開催
現場リーダー：現場リーダーへの通達
ネット　　：インターネットに掲示

・　半数以上が応急手当方法のための周知をしなかった。
・　回答したセンターの３割が現場リーダーへの通達で周知を図った。

⑤ケガ、疾病時の現地連絡先（センターの救護所等）

■　図 11　ケガ、疾病時の現地連絡先（センターの救護所等）に関する周知方法

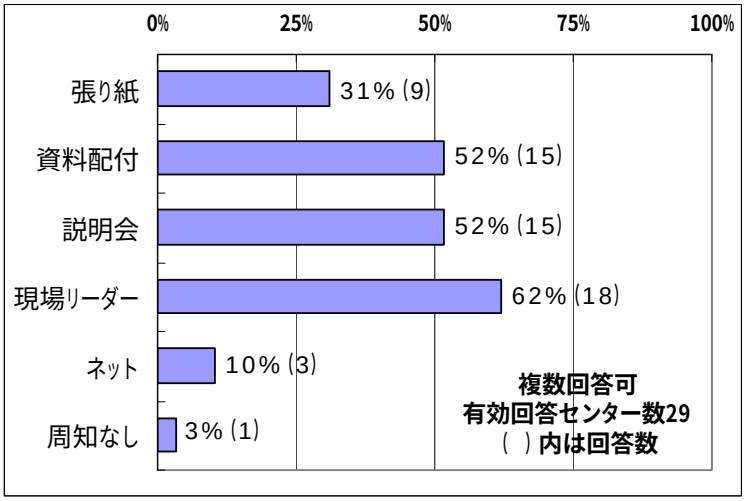


【凡例】
張り紙　　：センター内に張り紙等で掲示
資料配付：参加者への資料配付
説明会　　：説明会の開催
現場リーダー：現場リーダーへの通達
ネット　　：インターネットに掲示

・　現地連絡先は、現場リーダーへの通達例が多く、ついで、張り紙等で掲示した例が多い。

⑥必ず一定時間おきに休憩とること

■　図 12　必ず一定時間おきに休憩とることに関する周知方法

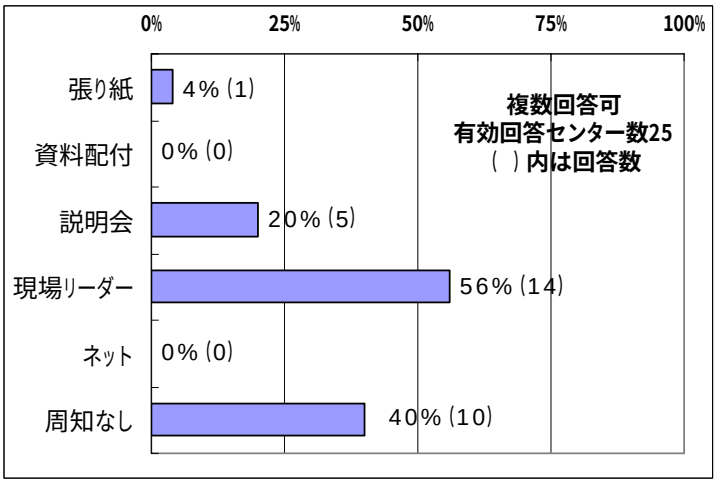


〔凡例〕
張り紙　　：センター内に張り紙等で掲示
資料配付：参加者への資料配付
説明会　　：説明会の開催
現場リーダー：現場リーダーへの通達
ネット　　：インターネットに掲示

・　休憩については、半数以上が参加者への資料配付、説明会の開催、現場リーダーへの通達等徹底して周知を図っている。

⑦天候急変時の対応

■図 13　天候急変時の対応に関する周知方法



〔凡例〕
張り紙　　：センター内に張り紙等で掲示
資料配付：参加者への資料配付
説明会　　：説明会の開催
現場リーダー：現場リーダーへの通達
ネット　　：インターネットに掲示

・　現場リーダーへの通達例が多いが、一方で対応のための周知をしていない例も多い。

（２）周知のための対策

設問

問２－２　その他、活動時のケガ・疾病予防方法の周知のためにとった対策があればお書き下さい。（自由回答）

活動する前にセンターで受付、オリエンテーションをする際に呼びかけるほか、活動現場を巡回し呼びかけることや活動後の衛生面の管理等､様々なシーンで安全衛生に配慮した対策がとられている。そのほか、ニーズを申し出た依頼者へ説明をした例もあった。

下記､「活動前」「巡回」「活動に関する配慮」「衛生面の配慮」等にわけて整理した。

分類	対策の内容
活動前	・ ボランティア受付時に保険の加入の有無を聞き未加入の時は加入した。(3) ・ 活動に出発する前のオリエンテーションで注意を促した。 ・ 活動前のオリエンテーションで、資料配付とともにアナウンス。 ・ センター開設当初から呼びかけたが、休まない人もいたため、必ず休むよう声かけなど徹底した。 ・ 保健師の協力によって、作業から帰ってきた方に休憩場所(保健センター)を提供し、血圧測定等も必要に応じて実施した。 ・ ボランティア受付時に、記載台に張り紙をし、水分補給等の注意の呼びかけを行った。
巡回	・ ボランティアセンタースタッフ等による巡回。 ・ 活動中もそれぞれの活動現場を回ってアナウンス。 ・ スタッフが各ボランティアの活動場所へ水を配るときに、ボランティアへの声かけ、リーダーに定期的に休憩を取るように指導して回った。 ・ 活動しているボランティアに注意を呼びかける。 ・ ボランティア一人一人への声かけ。
活動に関する配慮	・ 熱中症予防のため、看護師の指導により食塩水やスポーツドリンクを作り、班毎に持たせた。 ・ 非常に暑い中での作業だったので、熱中症等に大変気を遣った。 ・ ある程度の時間が経過したところで、ボランティアリーダーの方に連絡し作業状況や体調不良の人はいないか等、確認をとった。
衛生面の配慮	・ 活動後、靴の洗浄とうがいは必ずさせた。 ・ 作業から戻ってこられたら必ず消毒をするように呼びかけた。
その他	・ ニーズを受ける際、活動依頼者にもボランティアが休憩時間を取ることに関して理解を求めた。

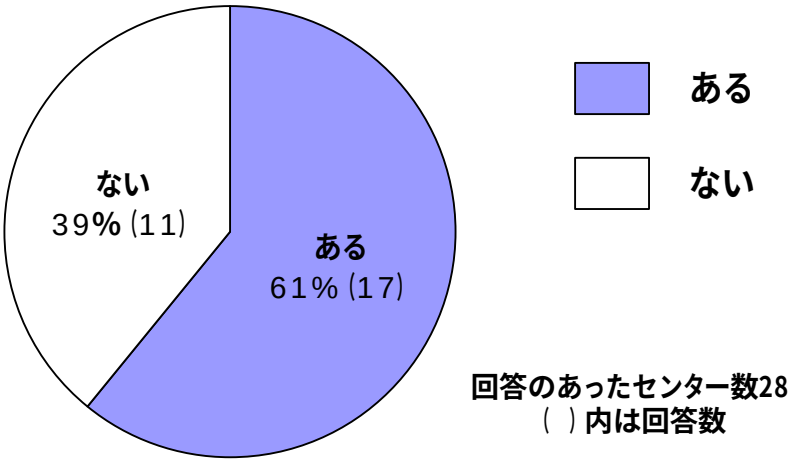
３．ケガ、疾病の実例等

（１）ケガ・疾病の実例の有無

設問

問３－１　貴災害ボランティアセンター等の活動中に、ケガや疾病が発生したことがありますか。（該当する選択肢に○を記入して下さい。）

■図 14　災害ボランティア活動におけるケガ・疾病の発生の有無

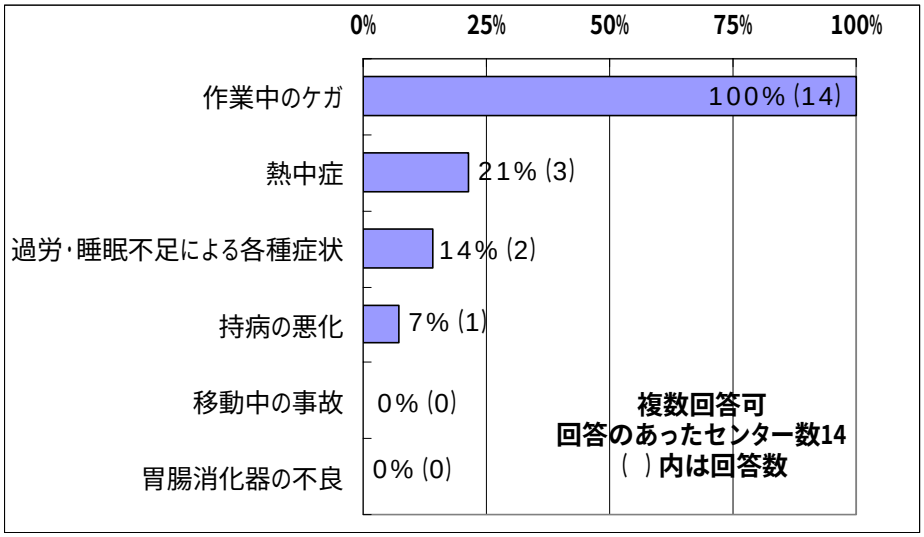


半数以上のセンターで、ケガ・疾病の発生があった。一方、およそ４割のセンターでケガ・疾病の事例がなかった。

設問

問３－２　どのようなケガ疾病だったでしょうか。該当する番号すべての回答欄に「○」を入れて下さい。（複数回答可）

■　図 15　ケガ・疾病の内容

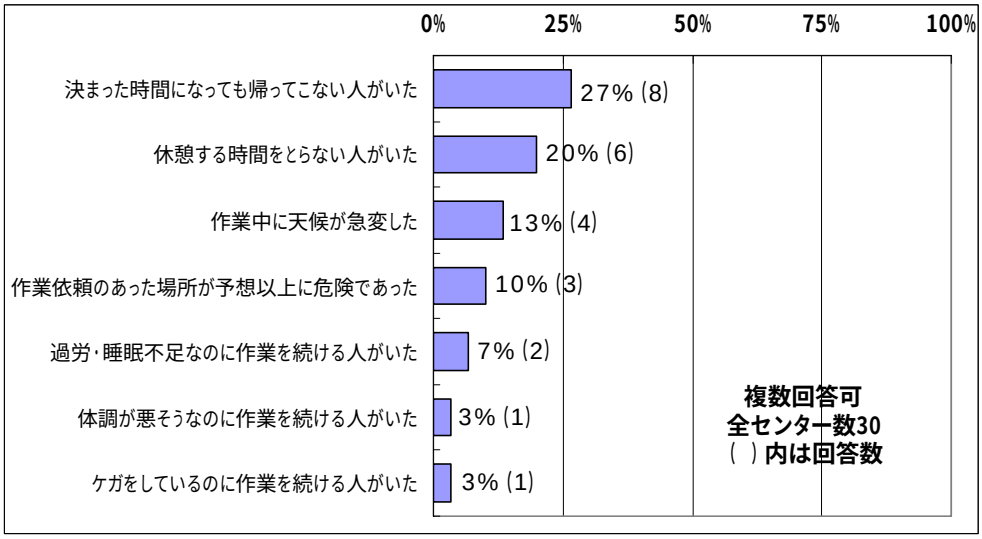


・　作業中のケガが一番多く、回答のあった全てのセンターで該当した。熱中症、過労・睡眠不足等も数例あった。

設問

問３－３　下記の様な事例があれば、該当する番号すべての回答欄に「○」を入れて下さい。（複数回答可）

■　図 16　対処に困った例



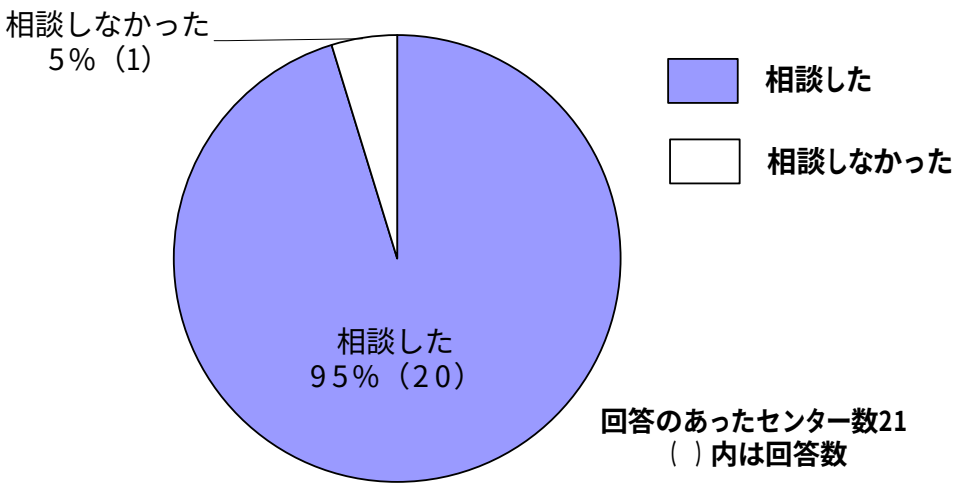
・　回答した約３割のセンターで、決まった時間になっても帰ってこない人がいた。
・　休憩する時間を取らない等の例もいくつかのセンターであった。

（２）専門家への相談

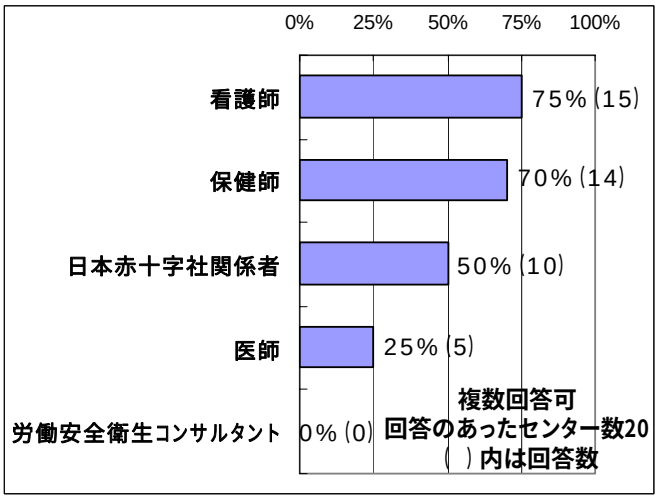
設問

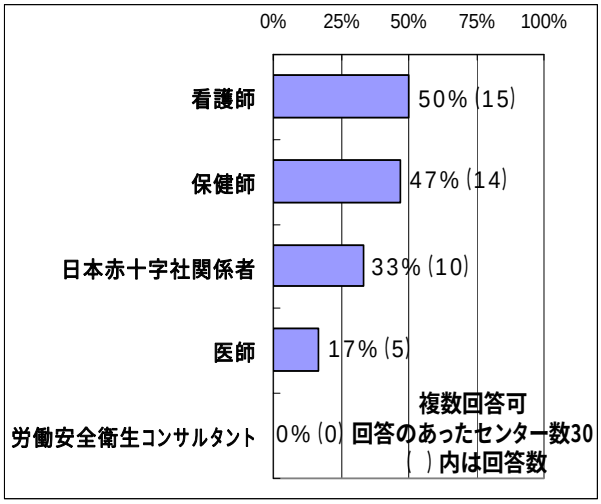
問３－４　災害ボランティア活動の安全衛生について、どんな専門家に相談しましたか。該当する番号すべての回答欄に「○」を入れて下さい。（複数回答可）

■図 17　専門家への相談の有無



■　図 18　相談した専門家





左：相談したと回答のあった 20 センターを母数として比率を算出

右：相談の有無に関わらず回答のあった 30 すべてのセンターを母数として比率を算出

・　回答したセンターのほとんどが専門家に相談している。

・　相談をしたと回答のあった 20 センターを母数とした場合、相談した相手は、看護師と保健師が約７割、日本赤十字社関係者が５割程度となっている。

４．その他

（１）自由回答一覧

設問

問４　安全な災害ボランティアセンターの運営や災害ボランティア活動の安全衛生の確保等について、役だったノウハウ、あってよかった用品、課題反省、提案、感想等があれば、ご自由にお書き下さい。

- 【専門家】災害ボランティアセンターの安全衛生について相談できる専任の専門家が必要。
- 【専門家】看護師が常駐し健康診断等を行う必要があると感じた。
- 【専門家】看護師がボランティアとして参加して、衛生面の配慮ができるようになった。
- 【専門家】被害があった学校では保健の先生の協力は役立った。
- 【専門家】全体の調整係・コーディネーターは地元の人間以外が良いと感じた。
- 【専門家】安全衛生の専門家を、行政の協力を得ながら独自に確保するよう努めている。
- 【役立つノウハウ情報】県社協が作成していたボランティア活動支援マニュアルが役立った。
- 【役立つノウハウ情報】県ボラからいただいていたマニュアルの見本が役立った。
- 【役立つノウハウ情報】ボランティアの安全衛生のマニュアルが提供されることを期待したい。
- 【役立つノウハウ情報】仮設の水道設置ノウハウが特に役に立った。
- 【資機材】作業中についたヘドロなどの洗浄に高圧洗浄機は役立った。
- 【資機材】災害時には（大量に購入するため）うがい薬や消毒液の購入に結構なお金がかかる。
- 【資機材】ゴム手袋は厚手のものが役立ったが、単価が高くたくさん購入できなかった。
- 【資機材】ヘルメット、防災無線、消毒液、うがい薬、紙コップ、ビニール手袋、軍手、マスク、タオル等の消耗品の備蓄に努めている。
- 【資機材】衛生に関する物品等を購入し、準備することが必要。
- 【資機材】物資は備蓄しておきたいが保管しておく場所がなく困っている。
- 【資機材】タオル、バスタオルは必要な用品。
- 【資機材】小さいサイズ（500ml）のペットボトルの水やあめ等は必要。
- 【資機材】消毒液、うがい薬に関しては手配が行き届かなかった。
- 【健康面の配慮】着替えの必要性について、広報等で募集をするとき周知する必要があった。
- 【健康面の配慮】熱中症、疲労の配慮について現場より指摘があるまで配慮できなかった。
- 【健康面の配慮】保管場所、お弁当の中身に対する配慮が必要（特に夏季）。
- 【救護班の設置】各市町村災害ボランティアセンターに救護班の設置を指導。
- 【救護班の設置】現地本部(サテライトセンター)地元救護関係者と連携して救護班の設置。
- 【衛生面の配慮】足洗い場の確保、シャワー室の準備をした。
- 【安全面の配慮】ボランティアの安全を考えた時依頼を断ることも数件あった。

災害ボランティア活動の安全衛生に関するアンケート調査速報（結果概要）

- ほとんどのセンターで、安全衛生に関する資機材・物資を調達しており、その多くは地元で購入した割合が多い。
- 調達のきっかけは、センタースタッフが必要と判断したケースが半数を占めており、マニュアルや規定等で決められているケースは１割に満たない。
- 物資の調達量が足りない、購入する資金が足りない例もあった。
- 安全衛生上、高圧洗浄機が必要とのコメントがあった。
- ケガ・疾病の予防・健康管理については、様々な形で対応している。現場のリーダーの判断にゆだねるケース、張り紙等で掲示するケースが全般的に多く見られた。
- ボランティア活動においては、ケガ・疾病が発生したセンターは全体の４割。特に作業中のケガの割合が多い。
- 回答したセンターの半数で、ケガ・疾病につながる恐れのある、困った出来事が起きている（休憩する時間をとらない人がいた等）。
- 回答したセンターの７割が、看護師や保健師等の専門家に安全衛生に関する相談をしている。
- ボランティア活動の安全衛生に関する情報が少ないため、マニュアルの整備や情報提供を望む声があった。

資料３

ボランティアの安全衛生フォーラム実行委員会編

災害ボランティア活動「目からウロコ？」の安全プチガイド

モノクロ版・カラー版

Check List 一日のはじまりに・・・

名前

住所

緊急連絡先（自宅等）

保険加入地域

体温（可能であれば計って）：

血圧（可能であれば計って）：　　／

昨日お酒を飲みました（はい／いいえ）　睡眠時間（____時間）

食欲（ある／ない）　便通（よい／よくない）

装備（持っているものに✔を入れてください）

□水・飲み物（多めに）　□タオル　□軍手など　□着替え

□救急セット　□常備薬　□保険証　□レジ袋（汚れたものをいれたり）

ボラ仙人のうんちく

ボランティア活動は「こころざし（志）」が大切じゃ。その思いは、きっと被災した人に元気や勇気を与えることができるはずじゃ。貴重な力を最大限に発揮するために、まず始める前に、自分の体調を冷静に振り返っておくれ。上のチェックリストを書いてみればおのずと分かるはずじゃ。装備の準備もよいかな？
昔から「そなえあればうれいなし」というからのう。
活動する君らも、そこに住む人たちも、安全に動き、くらさなければならん。
ボランティア活動で誰も傷ついてはいかんのじゃ。
まわりの体調にも気づかって、みんな元気に帰ってくるんじゃよ。

みんなを見守るボラ仙人より

メモ　今日のやる作業、本部やリーダーの連絡先、気になったことなど書いておこう！

-ボランティアの安全衛生フォーラム実行委員会編-　実行委員会連絡先：03-5974-3747（JFAS内）
このガイドは今後も更新していきます。ver1.03（2007.8.01.なつ。）

災害ボランティア活動

目からウロコの？

安全プチガイド

ボランティアの受け入れをしているか確認しよう！

被災地の天候を調べておこう！急に天候が変わることもあるよ。

体調はどう？調子が悪いなら行かないようにね

宿泊先は手配した？

服装や持って行くものをきちんとそろえよう。

どんな作業をするのかな？

被災地に行った人の話も聞いておこう！

1「さぁ、やるぞ!」

まず**自分の体調**を見極めよう。自己過信は禁物です。
仲間や被災地の人に迷惑をかけないように、
調子が悪い時は、無理せずに**「活動しない」**も選択肢。
水分も多めに持って。ペットボトル何本持った?

2「今日のお手伝いは?」

出発前に**みんなで確認**。今日の仕事はやったことがある?
作業にふさわしい装備は大丈夫?
作業の安全チェックポイントを書き出せた?
だれが安全担当?

3「無事に作業を進めるために」

現地に着いたら、すぐ作業は始めない。
役割分担は?　リーダーは誰?　連絡先は?
休憩時間は決めた?　飲み物は十分用意してある?
みんなでチェック!　みんなで守ろう!!
休み時間はみんなで一斉に。作業中もトイレは大切。
水分はこまめに。あまり暑すぎたら休みにしよう。

4「周りに敏感になろう!」

夢中になると、周囲が見えなくなる。
暑さはまだまだ続くかな?
天気は急変しない?
具合の悪そうな仲間はいない?
地元の人に無理させていない?
互いに声をかけ、確認しあおう。

5「何かあったら」

ふらっ・・。　ぼぉ〜。　くらっ??
「おかしいな」と感じたら、作業をやめて、リーダーに伝えよう。
どんなに防いでもケガすることもある。
その時にどうするか、役割を決めておくとあわてないで済むね。

6 終わった後に

熱い気持ちをクールダウン。
活動報告に**ヒヤッとした経験も。**
被災地でのお酒は控えよう。
泊まるなら、明日も元気に活動するため、
ちゃんと寝るのが最後の仕事。

イラスト：遠藤あおい

Check List 一日のはじまりに・・・

名前

住所

緊急連絡先（自宅等）

保険加入地域

体温（可能であれば計って）：

血圧（可能であれば計って）：　　／

昨日お酒を飲みました（はい／いいえ）　睡眠時間（____時間）

食欲（ある／ない）　便通（よい／よくない）

装備（持っているものに✔を入れてください）

□水・飲み物（多めに）　□タオル　□軍手など　□着替え

□救急セット　□常備薬　□保険証　□レジ袋（汚れたものをいれたり）

ボラ仙人のうんちく

ボランティア活動は「こころざし（志）」が大切じゃ。その思いは、きっと被災した人に元気や勇気を与えることができるはずじゃ。貴重な力を最大限に発揮するために、まず始める前に、自分の体調を冷静に振り返っておくれ。上のチェックリストを書いてみればおのずと分かるはずじゃ。装備の準備もよいかな？
昔から「そなえあればうれいなし」というからのう。
活動する君らも、そこに住む人たちも、安全に動き、くらさなければならん。
ボランティア活動で誰も傷ついてはいかんのじゃ。
まわりの体調にも気づかって、みんな元気に帰ってくるんじゃよ。

みんなを見守るボラ仙人より

メモ　今日のやる作業、本部やリーダーの連絡先、気になったことなど書いておこう！

-ボランティアの安全衛生フォーラム実行委員会編-　実行委員会連絡先：03-5974-3747（JFAS内）
このガイドは今後も更新していきます。ver1.03（2007.8.01.なつ。）

災害ボランティア活動

目からウロコの安全プチガイド

ボランティアの受け入れをしているか確認しよう！

被災地の天候を調べておこう！急に天候が変わることもあるよ。

体調はどう？調子が悪いなら行かないようにね

宿泊先は手配した？

服装や持って行くものをきちんとそろえよう。

どんな作業をするのかな？

被災地に行った人の話も聞いておこう！

1「さあ、やるぞ!」

まず**自分の体調**を見極めよう。自己過信は禁物です。
仲間や被災地の人に迷惑をかけないように、
調子が悪い時は、無理せずに**「活動しない」**も選択肢。
水分も多めに持って。ペットボトル何本持った?

2「今日のお手伝いは?」

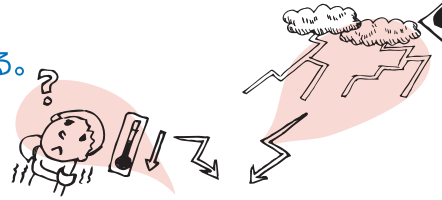
出発前に**みんなで確認**。今日の仕事はやったことがある?
作業にふさわしい装備は大丈夫?
作業の安全チェックポイントを書き出せた?
だれが安全担当?

3「無事に作業を進めるために」

現地に着いたら、すぐ作業は始めない。
役割分担は? リーダーは誰? 連絡先は?
休憩時間は決めた? 飲み物は十分用意してある?
みんなでチェック! みんなで守ろう!!
休み時間はみんなで一斉に。作業中もトイレは大切。
水分はこまめに。あまり暑すぎたら休みにしよう。

4「周りに敏感になろう!」

夢中になると、周囲が見えなくなる。
暑さはまだまだ続くかな?
天気は急変しない?
具合の悪そうな仲間はいない?
地元の人に無理させていない?
互いに声をかけ、確認しあおう。

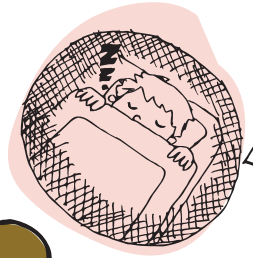


5「何かあったら」

ふらっ・・。 ぼぉ〜。 くらっ??
「おかしいな」と感じたら、作業をやめて、リーダーに伝えよう。
どんなに防いでもケガすることもある。
その時にどうするか、役割を決めておくとあわてないで済むね。

6 終わった後に

熱い気持ちをクールダウン。
活動報告に**ヒヤッとした経験も**。
被災地でのお酒は控えよう。
泊まるなら、明日も元気に活動するため、
ちゃんと寝るのが最後の仕事。



イラスト：遠藤あおい

資料４

ボランティア安全衛生フォーラム

報　告　書

日　時　平成１９年６月２４日（日）　１３：００～１６：３０
会　場　日本財団ビル・ホール（東京都港区赤坂１－２－２）

主　催　ボランティア安全衛生フォーラム実行委員会
後　援　内閣府、総務省消防庁、厚生労働省、国土交通省、日本赤十字社、中央共同募金会
協　力　日本財団、社団法人日本損害保険協会、災害医療訓練模擬患者研究会
特定非営利活動法人日本レスキュー・サポート・ネットワーク
特定非営利活動法人千葉レスキューサポートバイク
特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会
レールダル・メディカル・ジャパン株式会社、株式会社レスキューナウ
ミドリ安全株式会社、株式会社ダイナックス都市環境研究所

開催趣旨

市民活動の重要性や創意工夫については多くの議論や検討がされ、活動現場における事故や健康管理など「安全衛生」の重要性も認識されてきている。しかし、具体的な検討や対策についての充分な議論はなかなかされていないという問題意識から、平成１８年５月、市民による市民のための安全衛生対策を考える場として「安全管理・市民ネットワークフォーラム」を開催した。

今回、昨年のフォーラム以降に発生した災害に於いて活動した市民・ボランティア・若者や学生ボランティア、また被災地だけでなくさまざまなシーンからの「生の報告」をもとに、市民活動における安全衛生に話題を広げ、参加者の考え、意見を聞きだしながら、市民活動の安全衛生の課題を更に明らかにした。

フォーラムプログラム

12：00	**受付開始**
13：00	**開会** ・主催者あいさつ
13：10 *13：50*	**ボランティアの安全衛生・一問一答** 【進行】（以下敬称略） 岡野谷　純（NPO 法人日本ファーストエイドソサェテイ代表理事） 【パネリスト】 渋谷　篤男（社会福祉法人全国社会福祉協議会全国ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動振興ｾﾝﾀｰ所長） 洙田　靖夫（日本予防医学リスクマネージメント学会幹事） 栗田　暢之（特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事） 片山　洋平（NPO 法人国際ボランティア学生協会）
14：00 *15：00*	**ボランティアの安全衛生・事例報告** 【進行】 岡野谷　純 中川　和之（時事通信社防災リスクマネジメント Web 編集長） 【コメンテーター】 畑　　厚彦（日本赤十字社総務局組織推進部青少年ボランティア課長） ・　ヒヤリハットアンケート集計結果報告 ・　安全衛生を呼びかけるビデオ上映及びリーフレット発表
15：00 *16：30*	**パネルディスカッション** 【進行】 中川　和之 【パネリスト】 一問一答、事例報告の各登壇者 ・参加者との質疑応答
16：30	**閉会** ・協力あいさつ

ボランティアの安全衛生・一問一答　（発言要旨）

【進　　行】

岡野谷　純（NPO 法人日本ファーストエイドソサェテイ代表理事）

【パネリスト】

渋谷　篤男（社会福祉法人全国社会福祉協議会全国ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動振興ｾﾝﾀｰ所長）
洙田　靖夫（日本予防医学リスクマネージメント学会幹事）
栗田　暢之（特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事）
片山　洋平（NPO 法人国際ボランティア学生協会）

岡野谷氏

フォーラムには基調講演がつきものですが、この課題に対してどなたかが誰か一人でお話しをしていただくのは困難です。昨年のフォーラムでは、その場の議論を独断と偏見もＯＫで、模造紙に記録していただく「グラフィッカー」という試みを行いましたが、今回は「基調連続対談」という形でスタートさせます。これから、ボランティアの安全衛生全体の俯瞰的立場、専門家、現場、若者の４人の方に、お一人１０分、おつきあいいただき、問題の入口を整理したいと思います。

――――――――――

渋谷氏

Ｑ　まず、ご自身のお仕事とお役目を簡単にご紹介いただきますか？
　全国組織でいったどういうことをやっておられるのですか？

渋谷

社協の説明はややこしいので、主にボラセンのこと。地域福祉部の責任者でもある。

私たちのこの場は、時に危険と隣り合わせになる災害時のボランティア活動を、みんなが気持ちよく、活動した人も、その場の人も、悲しい思いを残したりしないためには、どうしたらいいかを考えている。

Ｑ　渋谷さんのお仕事は､災害だけでなく､幅広いボランティア活動全般と存じ上げています。私たちは、よく分かっているつもりですが、今日来られた方の中には、全社協のボラセンって何をやっているのか知らない人もいると思います。

40 年前ぐらいから活動をしている。その頃は、ボランティアという言葉を使えなかった。善意銀行という言葉もあった。奉仕という言葉は使えなかった。当時は、ボランティアという言葉が新聞に出ただけで職場で話題になったぐらい。

新しい課題に取り組むボランティアと一緒に仕事をするのがボラセンの仕事｡各地の組織と、そうでないいろんな活動と協力し合う｡協働すると言えば一言だが､そこで社協が何をするか。基盤整備が必要。新たな仕事にもチャレンジする。災害ボランティアがたまたまいるのではなく、新しい課題に取り組む人と一緒に取り組んでいるのがこの仕事。

Q　一般ボランティアの活動での安全について、何かお立場としてやれていることはあるか？

津のボランティア訴訟以降だろうが、全社協としては何か取り組んできた。

Q　それに関して、ご自身の現状評価と今後の課題は？

大雪の雪下ろし問題は、地域で大議論になった。とても決着できなくて、継続的にやると言うことになっている。ボランティアがやらないなら、専門職や職員がやるかというとそうではない。ニーズは予測外の物も沢山ある。ボランティアだから危険なことをやらないというルールだけでいいのか。安全のルールづくりをする一方で、最後は自己責任でやる部分を押さえておかないと、おかしな事になるのでは。

Q　近年、急速に充実しつつある社協の災害時のボランティア活動に関して、安全面で具体的な取り組みへの課題はどこにあると思われますか？

意識してやってきたかというとまだまだ。現場にお任せする部分が多くて、もう少し取り組まないと。ボランティア保険があるが、もしかすると、自分の責任ではなくて、何かあったらやってもらえると。災害時は現地の資金で払っているところがあり、そのことが、安全をきちんとすることとかみ合っているか検証が必要。

Q　活動するボランティアだけでなく、行政や専門家に期待したいことは？

ボランティア推進上、どこを支援するか、まだ考えなければならないと思う。能登のことで気になったのは、いろんなニーズがあるが、それに応えるときに、介護保険などで対応できることがあるのではないか。

機能的にできているのだけど、それを使えなくて、結果的にボランティアになっている。人間関係が危うくなっている社会、地域福祉の観点から、もう少し施策としてどうするのかが出てこないとボランティア活動が域内のではないかと気になっている。今回、全社協に力がないことを痛感した。

――――――――――

洙田氏

阪神大震災で震度７を経験した洙田さんは、労働衛生のコンサルタントの資格も持ち、産業医の経験もお持ちです。

１９９７年の日本海重油災害は、たくさんのボランティアが駆けつけて油の回収に働いたのですが､残念なことに外部や地元でボランティア的に活動された方が５人も亡くなってしまい、私たちの大きな反省点となっています。当時、洙田さんは、船首が漂着した地点に最も近い福井県三国町のボランティアセンターで安全管理のお手伝いをされ、桁違いに大勢の方が活動されたのにもかかわらず、大きな事故を出さずに済んだ立役者です。

Ｑ　洙田さんがかかわる段階で、当時のボランティアセンターに、労基署の査察が入ったとしたら、具体的にどういう点について、どんな指摘がされたでしょうか。ポイントを上げてご紹介下さい。

当時は、資格を持っていなかった。その後チャレンジして取った。外から見たらだいぶ苦労したのではないかと思われているが、余り苦労をしていません。そうではなくて、他の地域で既になくなっていました。

兵庫県でお年寄りが亡くなった。やばいなという雰囲気がボランティアさんのところにあり、そこに私が言って、たまたま次の日が天気が悪くて回収ができないので、間が持たないので話をしてくれと言ったら、受けた。もの凄くスムーズにいった。たまたま、三国に行った。応対してくれた人間が良いヤツで、スタッフになってくれと引っ張り込まれた。

全体には広がらなかった。三国町に 4 万 6 千人、すごく上手くいったが、隣の石川県や他の福井県のボラセンにも伝わってない。 一番きつかった三国では上手くいった。

Ｑ　あれから１０年経ちましたが、どういう点が改善され、何が改善されていないとお考えですか？

社協がもの凄く変わった。その頃の社協は、悪くはないが、よくもない。中途半端だったが。いまはもの凄く熱心。政府の対応も非常によくなった。最後のほうに話そうと思っているが、10 年経たないと成熟しない。1 カ所で上手くいってもそれだけで終わってしまっていたのがこれまで。専門家は必要だが、プロが少なすぎる。労働衛生のコンサルタントは 2000 人と少ない。産業医は 2，3 万人と少ない。

－－－－－－－－－－－－

栗田氏

いまや、全国の災害ボランティアのキーパーソンとなった栗田さんですが、本業というか、お坊さんでもあるありがたいお方です。そういわれると、どことなく、お顔にもありがたみがあるような、気もします。

Ｑ　大学職員だった栗田さんは、阪神大震災で学生たちとボランティアをしたことをきっかけに、ＮＰＯ設立にまで至られたわけですが、学生たちと一緒に阪神大震災の被災地に行くときに、安全面などについてどのように考えておられましたか？

お恥ずかしながら、きちっとした概念を持って被災地に行こうということには至っていなかった。誰もが思いだけで、社会福祉学部の学生がたくさんいたので、障害者が二重の苦しみを受けているという報道から、心の高まり、自分たちが何かをしたいという思い出は行っていった。そこにどんな危険や落とし穴などを考えることもしなかった。

大学としていくので、最低限の危険の情報は、先生から伝えていた。私はボランティアとは知らなかった。何でこんな事をするのか、普段から社会福祉学部の学生たちがやっていた。素晴らしい学生たちがいた。

信州の大谷派の別院をお借りして 2 カ月、1500 人が活動したが。 門限が 10 時。だから、現

場に行って毎日帰ってくることも基本とした。翌朝 5 時の開門の前に、きちっと寝るなどができた。結果
的には精神衛生上も良かったと思う。結果論だったが。偶然。中には学生は意気込んでいるので、10 時ギリギリに帰ってきて、その書類を夜通しやって、寝てなくて開門と同時に出かけていたが、過呼吸でぶっ倒れた学生もいて、救急車で運ばれてしまった。
　勇気を持ってできないという選択肢があると言うことも、学生から教わった。

Q　その後、地元で２０００年に東海豪雨災害があり、県全体のボランティア本部の責任者となられました。安全衛生面で、当時できなかったことで、事前に考えておけばよかったと思われたことは何ですか？　それはどうしてですか？

　水害は不衛生だと言うことを、ボランティアをしようと言うことが後回しになる。ボランティアセンターに安全衛生の部門があって、注意喚起する部署があったらよかったという反省はある。うがい薬や、水分補給、栄養補給はやってきたが、前面に出して気をつけてもらう努力は少なかった。

Q　阪神でも要望書を出してきたが

　当時は作れなかった。02 年の大垣水害で同じようにボラセンの設置にかかわったが、日赤に岐阜県支部の医師と看護婦が常駐していただいた。血圧を測ってくれたり、けがをする人がいたらすぐ対応してもらえる。ボランティアのために常駐してくれた。とてもよい取り組みだった。

Q　全国的なボランティアのネットワークの代表者でもありますが、災害ボランティアの活動になぜ安全衛生が必要だと思われるか、栗田さんとしていつも皆さんに言っておられることがあれば紹介してください。

　そんな偉そうなことは言えないが、皆さんに配らせていただいた水害作業マニュアルで、道具の使い方など。日本財団の黒澤さんの発案。黒澤さんは日本財団の方だが、阪神から被災者を見つめてきた仲間だと思っているので、その中で作られた。無料で届けられるので 100 部とかまとめて送れる。被災地にもまとめて送りたい。ボランティアの虎の巻になったらいいと思う。
　知らないと言うことが危険を招く。管理者側は情報提供する必要がある。あまり、安全というとボランティアは萎縮する。ボランティアを信じる必要がある。マスクをやってないということだけで批判するのではなく、その危険性を分かって対応できるようにしてもらいたい。

――――――――――

片山氏

Q　ありきたりの質問ですが、片山さんはどうしてこういう活動にかかわろうと思ったのですか？　これまでのオジさんたちのような、職務上的な立場もないように思いますが。

学生が災害現場に出ることが驚き。遠くで起こっている自分とは全く関係のない事という認識でいた。学生が現場に出て、自分たちにできることを一生懸命やっていることに心を打たれた。授業の一環でのボランティア活動はまだだった。ＩＶＵＳＡで能登に６人ぐらい行った。

Ｑ　最初に現場で危ないッと感じたことは、どんなことでしたか？もっともひやりとしたことは？

新潟の中越地震にいった。１主幹ほど、新潟にいて、非日常の現場に入った。倒壊家屋の片付けやお宅の掃除などを手伝ったが、ハッとした瞬間は、お宅で活動をしていたときに、震度５弱か５強の地震があり、家がすごく揺れた。そういう自身を体験したことはなかったので、本当に動けなくなり、その場で頭を抱えてしゃがんでいることしかできなかった。地震の怖さを肌で感じた。学生とボランティアの方とで作業をしていた。被害はそれほどなかった家で、軽い掃除だった。

比較的被害が軽い地域だったので、学生ができる範囲で仕事をしたので。

Ｑ　いまは、学生たちをまとめる立場だと思いますが、安全衛生に関して、彼らに対してどんなことを言っていますか？なぜ、そういう言い方をするのかを含めて、教えてください。

学生に対して安全管理を私たちの経験から話をしている。ボランティアに従事する物として、被災者や受け入れ先に迷惑をかけては本末転倒。リスクヘッジと行って、危機への対応を参加学生を自分たちの頭で考えさせるようにしている。装備の話もあったが、水害のボランティアに半袖半ズボンで参加する学生もいるが、きちんとしたレクチャーをしている。一般に募集するときなどだと、そういうスタイルで来る。その時は杉並の水害だったので、なるべくケガしないような現場で働いても
らった。

専門的な知識も大切になる。活動はずっと続けていきたい。

ボランティアの安全衛生・事例報告　（発言要旨）

畑：
赤十字赤新月、救援者側のこころのケアが問題になった。
支援者側の心の問題＜看護師を中心にチーム、今はボランティアが加わっている。

岡野谷：
安全衛生調査、速報版の報告。支援者の心のケアについて活動してきたが進まなかった。
安全衛生部会で検討を進めてきた。安全衛生について情報収集ができていなかったでの把握しようと 17 年 18 年を対象にアンケートをとった。主に風水害が対象。36 センター中 26 センターから回答があった。8 月のボランティア検討会で正式版を目指す予定

畑：
１、アンケートを見ての感想
作業中の怪我が多かった、持病の悪化というのが気になる。
チームで作業の現場にいるときのリーダーが、事前に危険な状況を把握しておくことが大切。
ボランティアの状況を確認しながら作業をすることが大切。
7 年位前に水害が多かった時、全国からボランティアが多く集まったとき水害ボランティアマニュアルを作った。事前に 3 分間くらいの短い時間で最低限の安全を確認しあう、ルールを決めると書いてある。ボランティア自身の自己管理が必要。持ち物によってはついてから用意できないものもあるので、事前に知っておいてほしい。

２、マニュアルの具体的な中身について
作業手順は意外と落ちる部分であろう。健康管理に直接つながらないように思うが、何のためにどういう効果を持つのかを十分に理解していないと、モチベーションが下がる。
手順、目的、意味について抑えておくことが大切。
心の問題について、活動から帰ってきたときに、簡単なミーティング（デフュージング）自分の感じたことをお互いに話す時間を。
日赤で準備しているものは軍手くらい。装備はボランティア自身が持ってくるものだろう。
センターで渡せるもの、自分で用意するもの対応ができる。

栗田：
水害作業マニュアルのイラストは、道具をどう使うのか、なんという名前なのか、準備に使える。資機材に関して、貸しても、機材が増えて帰ってくる。まだまとまっていないが、今後は共有できるようにしたい。

：畑
実際は研修でもきちんとやっている状態ではない。
ボランティアセンターに専門家がいること、専門家に相談できるシステムを今後検討していく余地がある。紙に書かれても、どれほど目を通されているか、読まれないということを事前に考えて、最低限の共有事項を示すことも必要である。

パネルディスカッション　（発言要旨）

キーワードは被災者主体。地元のキーパーソン。外部からの支援者とつながる。

支援プロジェクトについて
地元の市町村・社会福祉協議会に立ち上げを仕掛ける。初めての経験のところが多い。アドバイスのできる人を派遣。さまざまな団体と組んで派遣している。主力の NPO、アドバイスのできる人、経験・知識のある、近隣から送っている。今回の能登半島地震では、東海北陸ブロックで調整。

畑：日赤では医療救護、心のケアの訪問活動。無線や若手のボランティアがうごいている。

片山：IVUSA は、地震発生から 2 週間後にニーズ調査を行った。大規模に派遣はしないと判断。

吉田：輪島としか町にボランティアに行った。赤紙の家に、可能であれば家屋に入って活動をした。仮設住宅の使い勝手がよくなるように大工作業をした。

中川：応急危険度判定について

栗田：赤紙が全てだめではない。応急判定なので個々に事情が違う。住民が待ちきれずに入ってしまうことは必然としてある。そこにボランティアが入ってはいけないという線を引いて判断することはどうだろうか。安全確認について、専門家の建築士が見るなど、被災家屋のひとつひとつに目を向ける必要がある。

渋谷:支援プロジェクトでも同様の意見が出ていた。豪雪のときにも同じような意見があった。

畑：心のケアで訪問活動するときに、現に赤紙の家で生活をしている。危険と判断されて住んでいる、ケアのときにどう判断するのか。

片山：実際に作業したこともあった

中川：応急危険度判定について。あやふやなことがあるので、専門家レベルでの議論が必要。ボランティアの側からも議論を、やっていくことが大切。

栗田：赤紙がだめで、ゴミがいいのか。ゴミのほうが危険。行政がきちんと対応すべきことと考える

洙田：ゴミの問題は常識の範囲で考えてほしい。赤紙もゴミもボランティアでどう対応すればよいのか。

中川：ボランティア＝善意の話で、どこまでするのか。制度的には、ごみ処理は９割国費でできるようになっている。

栗田：私たちから勢いだけでやってはだめですよ、それだけではなく、ボランティアをもっと信じていいのではないかと思う。

中川：一定の情報や理解があっての前提があってのこと。

安全を守るために、ボランティアに情報はいきわたっているの？

片山：学生にできることがある。

栗田：水害の場合、最低限、熱中症対策やうがい手洗いを徹底すること、気づかせること。三宅島の場合、4 年間も放置された庭の芝刈りなど、経験が必要な作業には、できるところにできる人が入るように。穴水では仮説に移る際、廃校になった中学校に荷物をあづかることがあった。老人会の方がとりしきっていた。その地域地域で取り組み方があった。

畑：検証が足りない。マニュアルの再検証をきちんとやっておく必要がある。当時良い視点でまとめられていたとしても、知恵を集めてくることが必要。紙で書くことの限界がある。伝える時間を持つ、必ずチームでうごく、背景も必要。

中川：被災地の住民の方は、情報は得られているのか

渋谷：ようやく地域で町内会等で訓練されているが、。本人たちが判断できる、地元が動ける情報を出すことが大事と感じる。一方でボランティアが大量に入ったときに、判断がきちんとできるようにすることが大切。

栗田：外部支援者がワーッとはいって、一定期間後に出て行ったときに、地元で復興につながっているか。今回の穴水町では、住民の方々の取り組みがあった。

中川：雪害について
米沢の豪雪地帯と山形市内では気候が違い、雪下ろしができない。
ここ２０年くらい雪が無く、近年の豪雪でけが人が多く出た。

洙田：素材は地元のものをつかうとよい。
ボランティアにとってプラスのこともあるけれど地元にとってプラスの材料が必要

岡野谷：危険度判定の認識、人によって違う。どうやってギャップをうめるのか？責任の所在はどうなるのか？

吉田：判断できる人、できない人がいる。判断できる人の責任も考えないといけない。ボランティアの様子をみて、どこまでお願いするのか判断をするようにしている。ボランティアの力量によって作業内容が判断できれば、もっといろんなところで活動ができるのではないかと思う。

中川：多少、現場でのルールをはっきりさせたほうがよい。判断できる自由度双方を考えたほうがよい。

栗田：何でもかんでもできるわけではない。疑問が生じた場合はセンタースタッフが現場を見て対処したほうがよい。人によって判断が違うのは当然。いった人ができなければ、その場で考えていけばよい。広島の例。屋根の上にのった石をとってほしいとのニーズ。現場を見て、行政に対応を求めることにした。

渋谷：休憩をとるよう徹底はしている。最後はボランティアの判断にゆだねられる。コーディネーターに責任が問われるのはおかしい。個人の責任にゆだねられるところがある。

片山：学生は勢いがある。なんでもやりたがる。学生にできること、プロの仕事、基準があるとやりやすい。線を引いてもらえるとたすかる。自分たちで判断することが大事だとは思う。

栗田：休憩をとる。個人差もある。アンケートの数字が一人歩きすると困る。被災者の人がお茶を出してもらえることがある。被災者とのやりとりは大事。

岡野谷：休憩は３０分ごと。数字ではなく、本人の体調などと加味して考えていく必要があるだろう。被災者やボランティア同士の交流も必要。

中川：重油災害のとき。ボランティアががんばることで住民が無理してしまう例もある。

洙田：ボランティアと現地の人の競争になっていた。（ナホトカ）ボランティアも現地の人も一緒に休むことにした。ドラえもん先生になって。のんびりすごした。その雰囲気を伝えるようにした。厚生労働省。ボランティアの安全衛生について調査をはじめることになった。数値が一人歩きするのは怖いので気をつけないといけない。浜松医大の先生や厚労省保健部門がかかわっている。画期的な研究なので期待している。

中川：専門家の役割。マニュアルなどに記述するための根拠、なにかリクエストがあれば。

渋谷：基準は作ったうえで、現場（センター等）で任せる形にならないと。拘束力が働き動きづらくなる。

■ちょっと待って！災害ボランティア（試作版）　ビデオ上映

内容

災害ボランティア始めての学生がボランティアセンターに到着する。しかし、作業には不適当な服装や体調不良で来てしまう学生もいる。

被災地の危険な場面や倒壊家屋の様子、ボランティア作業風景の一連の映像を通して、見る人に安全衛生面での注意喚起、気付きを促す。

■目からウロコの安全プチガイドの試作版

■安全衛生のアンケート速報版報告

災害ボランティアの安全衛生についての情報収集のため、内閣府防災担当において、17 年・18 年の災害ボランティアセンターを対象に災害ボランティア活動の安全衛生に関するアンケートを行った。主に風水害が対象であった。

36 センター中 26 センターから回答があり、速報版を報告した。

平成１９年度

災害ボランティア活動の安全衛生に関する調査

速報版

もくじ

１．安全衛生に関わる資機材・物資について 1
（１）調達した資機材・物資と調達先 1
（２）調達のきっかけ 3
（３）調達の際困ったこと等 4
２．ボランティア活動の安全衛生に関する配慮 6
（１）ケガ・疾病の予防、健康管理について 6
（２）周知のための対策 10
３．けが、疾病の実例等 12
（１）ケガ・疾病の実例の有無 12
（２）専門家への相談 13
４．その他 15
（１）自由回答一覧 15

内閣府は、平成１７・１８年度設置された災害ボランティアセンターを対象に災害ボランティア活動の安全衛生に関する対応等について、その現状把握や課題を把握するために、アンケート調査を実施した。

実施期間	平成 19 年 6 月 6 日～6 月 15 日
対　象	平成 17・18 年度設置された災害ボランティアセンター[1]（風水害） ただし、能登半島地震によって設置されたセンターは除く
調査方法	災害ボランティアセンターの設置・運営に関わった道・県または市・町社会福祉協議会へのアンケート（全国社会福祉協議会の協力を得る）FAX および郵送による回収
回　収	36 センター中 26 センター（72%） ※締切り後の回答もあり、回答率は上がる見込み

[1] 平成１７・１８年度に設置された災害ボランティアセンターを対象にしたアンケート調査 http://bosai.go.jp/bvc/index.html で公開

ボランティア安全衛生フォーラム実行委員会
事務局　特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサェティ
東京都北区西ヶ原 4-33-11　TEL:03-5974-3747 FAX:03-3910-1368

資料５

国土交通省

除雪ボランティアの安全衛生に関する調査

報告書

除雪ボランティアの安全衛生に関する調査　報告書　目次

Ⅰ．調査の目的 1

1　除雪ボランティアの安全衛生の必要性 1
2　災害ボランティア活動の経緯 2
3　調査の目的 2

Ⅱ．調査の方法 3

1　調査概要 3

Ⅲ　調査分析 4

1　調査分析について 4
2　健康リスクの回避 8
3　環境整備面への対処 23
4　安全衛生に関する留意点 32

Ⅳ．今後の課題・展望 49

1　継続的な取り組みと情報共有の重要性 49

参考資料 51

寒冷環境による身体への影響 51
第一回越後雪かき道場　メモ 52
第二回越後雪かき道場　メモ 54
小型建設機械特別講習 56
越後雪かき道場　上級編　メモ 59
調査報告メモ 61

Ⅰ．調査の目的

１　除雪ボランティアの安全衛生の必要性

平成 17 年度の中越地震後の豪雪、平成 18 年度の全国的な豪雪と、3 年続きの豪雪となった。日本にあって、高齢化率が 20 年先行しているとされる豪雪地域で、除雪の担い手の世代交代ができないまま過疎が進行している。死傷者の大半は除雪作業中の事故によるもので、3 分の 2 が高齢者であったことから、「高齢者の除雪支援」の必要性が、社会全体に認識されるようになった。

高齢や障害など援護を要する場合には、地域内の互助や行政による福祉施策の範囲で支えることが原則であるが、雪に慣れ、十分に備えがあるはずの豪雪地でさえ、想定を超えた量が集中して降れば、当然、地域内の自助・互助・公助では支えきれなくなる。
急速な過疎高齢化は、地域の実質的労働力を減らし、支える側（比較的若い人）の負担が過剰になることも事故の引きがねとなっている。

近年は，ボランティア希望者の受付の円滑化や情報発信，被災地の支援ニーズとの調整等，被災地におけるボランティア活動と情報発信の拠点となる災害ボランティアセンターが設置されたり，被災地外から円滑にボランティア活動に参加できるようなボランティアバスツアーが企画されるなど，ボランティアの意欲を尊重しつつ，自発性・自律性の確保と，ボランティア活動の有効性や安全性，被災地の受入れの負担軽減とを両立するような仕組みづくりや知恵の共有が進みつつある。今後ますます高齢化が進む中で、除雪ボランティア活動の仕組み・体制づくりが一つの方向性として有望なものと考えられる。

しかし、除雪ボランティアは、ややその作業が特殊でありボランティアをする側にとって敷居が高いこと、受け入れる側にとっては「人に頼らない」が原則であったこと、ボランティアのけがや指導、謝礼などの懸念材料の方が多く、十分な活動が実らない状況であった。つまり、除雪ボランティア活動の仕組みづくり、ボランティアが安全に活動できる環境整備が求められている。

2　災害ボランティア活動の経緯

災害ボランティア活動は、古くは関東大震災時，近年でも平成２年雲仙普賢岳噴火災害や平成５年北海道南西沖地震災害などの際にもみられたが，平成７年１月 17 日に発生した阪神・淡路大震災では，のべ 130 万人以上の人々が、平成 16 年 10 月 23 日に発生した新潟県中越地震では、10 万人以上の人々が各種のボランティア活動に参加したと言われている。

近年では、災害救援，避難生活の支援，家屋の泥かきなどの復旧活動，被災地や被災者の活力を取り戻すための復興活動など，数多くのボランティアの方々が，自発的，自立的に，様々な主体と協働して，活発な活動を行っている。

それと平行して、ボランティアの安全衛生については様々なシーンでその重要性が話されてきたが、「ボランティア活動を抑制するもの」と捉えられることや、円滑なボランティア活動の推進が重要視されることもあり、各地の情報が明らかにならないままとなっている

しかし、平成 17 年３月より，内閣府では，各地の防災ボランティア関係者等からなる「防災ボランティア活動検討会」を開催し，環境整備のための検討を行われるようになり、安全衛生の重要性についても議論をされるようにあった。ボランティア自身の手によって定期的な検討会が開催され，また，フォーラム・シンポジウムの開催なども通じ推進されるようになった。

3　調査の目的

自発的，自立的に，様々な主体と協働したボランティア活動を活かすためには、安全な環境整備が進むことで、安全で安心な雪国づくりが推進することができる。

本調査では、いままでの災害ボランティア活動の安全衛生に関する情報やノウハウを生かし、除雪ボランティア活動の仕組みづくり、ボランティアが安全に活動できる環境整備に向けて、ポイント整理、具体的な方策を明らかにする。今年度行われた「雪かき道場」など除雪ボランティアの養成イベントなどの検証や災害ボランティア活動の安全衛生に関する情報の整理を行うこととする。

Ⅱ．調査の方法

1　調査概要

（1）調査体制

本調査を行うにあたっては、内閣府「防災ボランティア活動検討会」安全衛生部会のメンバーと連携して調査を進めていく。

（2）現地調査

災害ボランティア活動の現場経験者（安衛生部会メンバー等）とともに「雪かき道場」「雪かきボランティア活動」の現地調査を行う。企画運営者や参加者からの聞き取りや実際の活動に参加し、安全衛生の環境整備について、留意すべき点を整理する。

【調査実施日】

日時	場所	調査員
1 月 13 日	青森県青森市	岡野谷純（日本ファーストエイドソサェティ）
2 月 10～12 日	新潟県長岡市山古志地区	中川和之氏（時事通信社） 津賀（ダイナックス都市環境研究所）
2 月 24～25 日	新潟県越後湯沢市	洙田靖夫氏（労働衛生コンサルタント・医師） 蓮本浩介氏（兵庫県立福祉大講師）

（3）文献等の資料収集

防災ボランティア活動に関しては、書籍やブックレット、活動報告書などの資料や、都道府県、市町村単位や知見者によるボランティア活動マニュアルなどを様々な資料がある。

そのような情報を広く収集し、安全衛生に関する環境整備のポイントを整理する。

（4）関係者ヒアリング

現地調査の結果や文献等の資料などを整理し、部会メンバーなどから安全衛生に関する環境整備のポイントや進め方、特に企画運営者に向けての情報提供について意見交換を行う。

日時	場所	内容
1 月 20 日	東京都内	青森調査の結果報告
2 月 26 日	東京都内	新潟調査の結果報告
3 月 7 日	東京都内	報告書概要報告

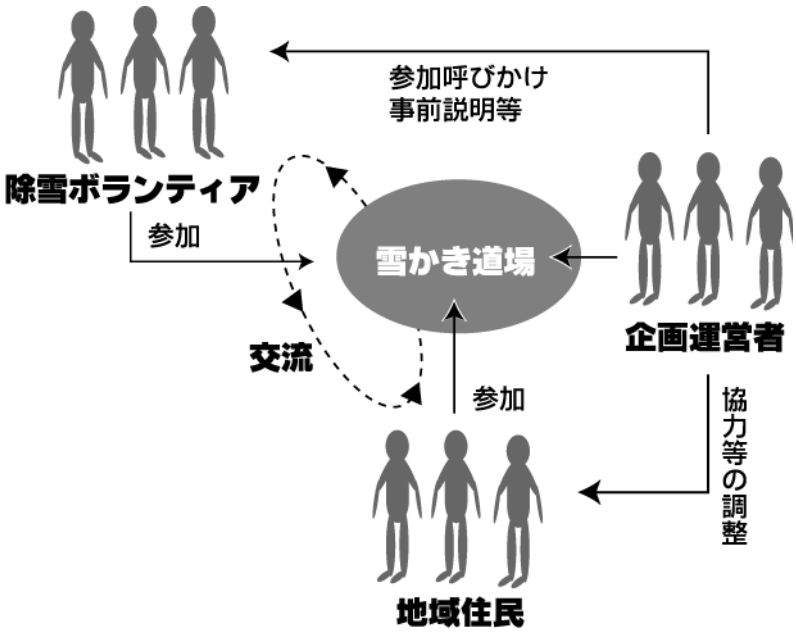
Ⅲ　調査分析

1　調査分析について

（1）調査分析の概要

除雪ボランティアの安全衛生を整理するにあたって、まずは「雪かき道場」のしくみを整理しておく。下図のように、関わる主体は「除雪ボランティア」「地域住民」「企画運営者」の 3 者にわかれている。

雪国での除雪支援だけでなく、「雪かき道場」では、実施を通じて除雪ボランティアと地域住民の「交流」を意識した企画になっている。



図．雪かき道場の概要

「雪かき道場」のしくみとその実態を把握した調査結果より、調査分析については、大きく３つに整理する。

まずは除雪ボランティア活動を行う環境は、通常より気温の低い環境であるため、健康リスクが高まる。具体的な健康リスクとその対策について整理する。除雪ボランティア活動をする個人レベルでの対策について留意点をまとめる。

次に、「雪かき道場」のようなボランティア活動のしくみに関する環境整備のポイントについて整理する。ボランティアの受け入れ体制やしくみ全体に関わる企画運営者を対象にした対策について留意点をまとめる。

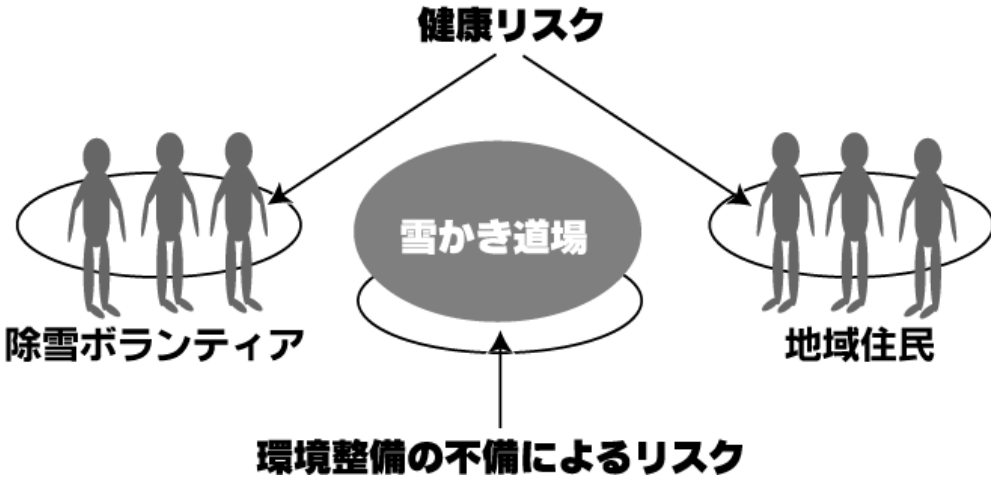
さらに、安全で安心な「雪かき道場」の企画運営について、安全衛生面からの配慮点を、企画から広報、事前準備、当日運営、その後のフォローと時系列で整理する。

（２）想定されるリスクとその対処

①想定されるリスク

雪かき道場の実態より､想定されるリスクは大きく二つに整理することができる｡一つは、除雪ボランティアや地域住民の健康リスクである。除雪を行う環境は、都会での一般的な冬期の環境に比べて、健康リスクが高まるため、通常より配慮が必要となる。

さらにもう一点は、雪かき道場の行われる作業環境整備の不備によるリスクである。除雪を行う環境は、除雪ボランティアにとって不慣れな環境であり、また、けがや事故が起こりやすい環境であると言える。また地域住民にとっては、毎年経験しているが､「慣れ」による配慮不足もリスクと言える。



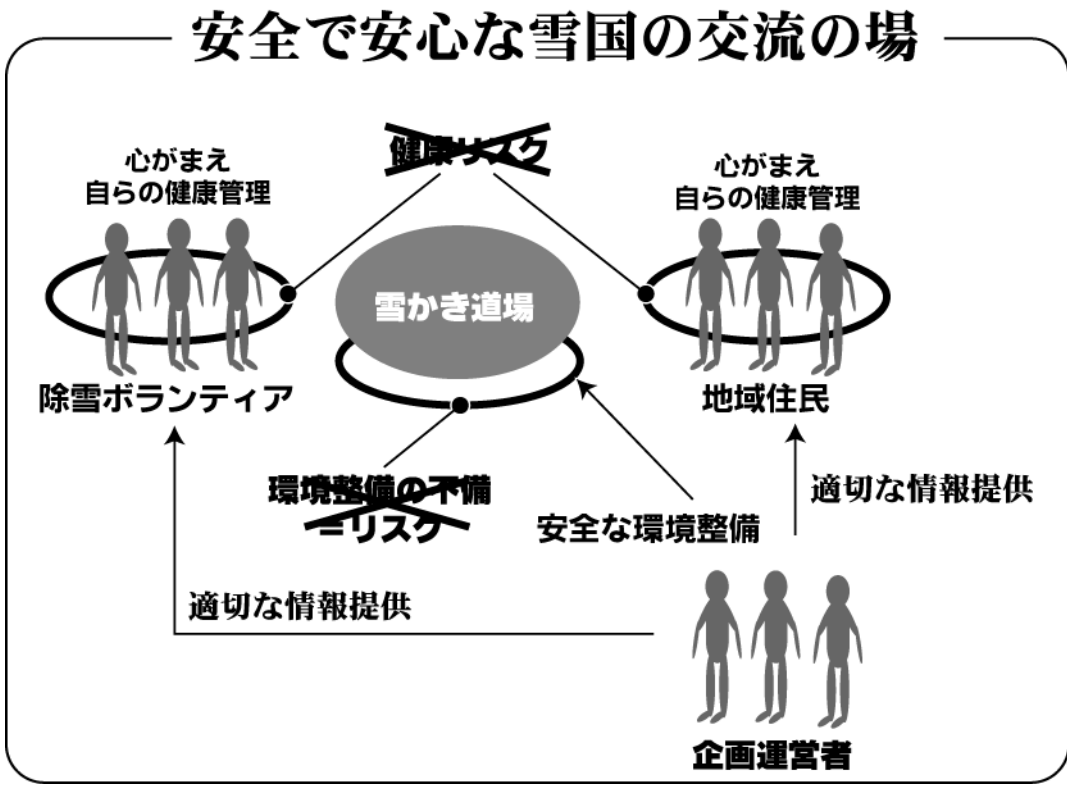
図．想定されるリスク

②リスクの回避

リスクの回避のためには､想定されるリスクを一つずつ回避する方策を考える必要がある。

健康リスクの回避のためには、除雪ボランティア・地域住民の「心がまえ」「自らの健康管理」が原則となる。なにも対処がない場合、除雪ボランティア・地域住民自身が「健康リスクがあること」について意識をしないことが考えられるため、企画運営者からの「適切な情報提供」が求められる。

環境整備の不備については、企画時点から当日運営に至るまで、企画運営者による「安全な環境整備」によって回避することができる。除雪ボランティア・地域住民自らが意識をして、回避するという手段もあるが、それだけでは回避できない点もあるため、企画運営者の配慮や工夫により、環境整備の不備を回避することが望ましい。



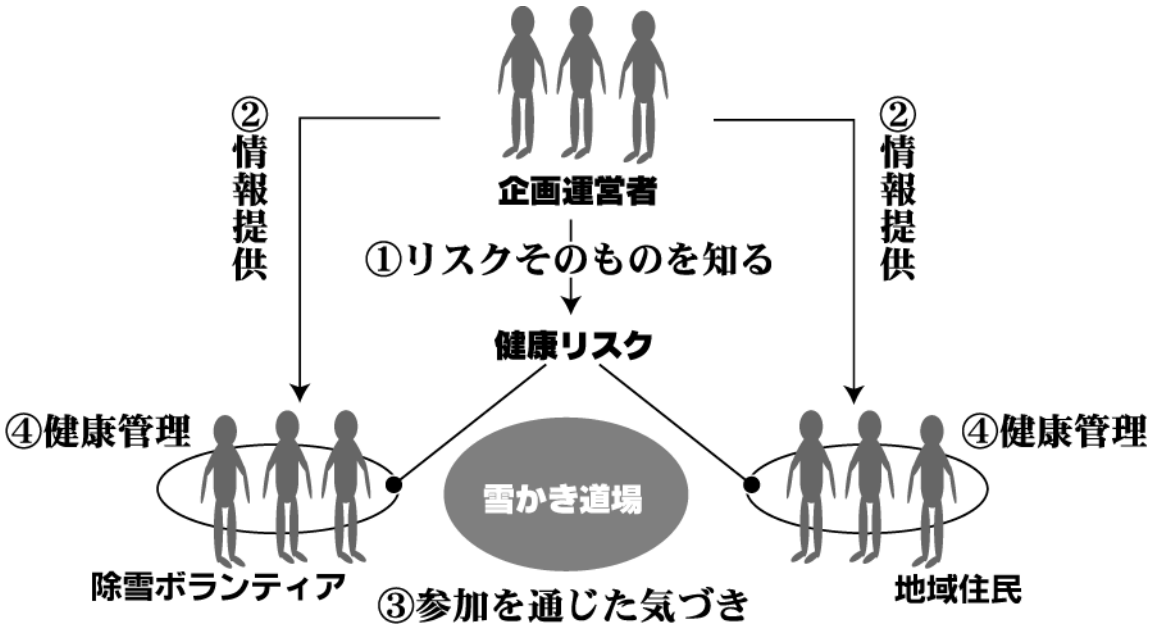
2　健康リスクの回避

除雪ボランティア活動がされる環境は、気温が低いところで身体を動かすことになるため、通常の生活と比べると健康や活動についてのリスクが高くなり、病気やケガの可能性が高くなる。そうしたリスクを具体的に想像し、的確に対応するためにも、まずは基礎的な情報や注意点について理解する必要がある。

健康リスクの回避は、大きく４つのステップにより、対処することが考えられる。

①リスクそのものを知る
②情報提供
③参加を通じた気づき
④健康管理

詳しい回避対策については、次ページ以降に整理する。



図．健康リスクの回避

①～④までの回避対策については、企画運営者だけで考えるものではなく、医師・看護師など専門家からのアドバイスを得ることで、具体的な回避対策ができるものと思われる。また、参加者へのアンケート調査などを行い、回避対策自体の検証や評価なども必要であろう。

プログラムや作業量によって対策が変わってくることも考えられるため、実施した対策自体の情報共有、ブラッシュアップされることが期待される。

（1）リスクそのものを知る

企画段階において、健康リスクとしてどのようなものがあるのか、企画運営者自身が知ることが求められる。身体への影響と、配慮すべき疾病、傷害とその対処について、既存の文献等からとりまとめた。

①身体への影響

除雪ボランティア活動が行われる環境は、一般的に気温が低く、一般的に寒冷環境という。寒冷環境下では、身体が末梢血管の収縮が起こり、寒冷ふるえが生じる。そのほか、下記のような症状が起こる可能性が高くなると想定される。

- 末梢の血管が収縮し、血圧上昇と心拍数の増加（これは一概にいえず脈拍の頻度が増える場合や脈拍が弱くなる場合がある）。
- 筋肉の動きが悪くなるほか、排尿の回数が増えたり気づかぬうちに脱水が進行して、手足の指先部分の血液循環が著しく阻害
- 身体の中心部が冷やされることによる心臓の不調
- 冷たい空気を大量に吸入することによって、気管支の炎症が起こりやすくなる。
- 寒さによって、手作業がしにくくなる。
- 寒さで体の内部の体温が低下すると、警戒心や論理的思考能力が弱くなる。

②配慮すべき疾病、傷害とその対処

寒冷環境下で作業を行う場合、配慮すべき疾病、傷害とその対処を下記に整理した。

想定される各種疾病や傷害のリスクへの対策としては、衣類を適切に調節すること、いつでも避難できる暖かい場所を確保しておくこと、そして温かい飲食物や暖房器具など、外部から熱を十分に供給できるようにしておくことが重要である。特に衣類については、こまめに注意をはらう必要がある。

作業に入る前に必ず、準備体操を行い、ゆっくりと始めます。個人の体力や体調にあわせて作業を調整し、無理な作業は控え、休憩を細かくとることが望まれる。

配慮すべき疾病、傷害とその対処

低体温症

【症状】

体の中心部が摂氏 35 度以下になった状態をいう。身体の熱損失が高くなると、体が激しくふるえ、動きが鈍るといった症状があらわれる。体温がさらに下がるとふるえは止まり、意識がもうろうとし、正常な判断ができなくなる。重度の低体温症になると、昏睡状態になり、心拍数や呼吸数が低下し、ついには心臓が停止し凍死に至ることもある。個人差はあるが、高齢者や乳幼児に発生しやすいほか、飲酒や喫煙、栄養不良によっても低体温症にかかりやすくなる。

【対処】

身体を冷やさないために、適切な衣類と装備を着用して、衣類が水などに濡れないようにしなければならない。また、ふるえやつまずきなど初期症状を見逃さないようにする。特に頭部の保温は重要である。激しいふるえは体温低下の危険信号。

凍傷

【症状】

寒冷によって起こる皮膚病。初期には、皮膚が赤くなる、かゆみ・痛み、腫れ、しびれなどの症状が現れる。状態が進むと、感覚がなくなり、水ぶくれ（水疱）が生じる。ひどい場合には、皮膚が凍結し、凍傷となった部分を失うこともある。露出部、または末端部、主に足、指、耳、鼻などに生じやすい。

【対処】

適切な衣類と装備を着用し、手足の指、耳、鼻などの末端部の防護に留意する。手足の痛みは危険信号。

脱水症

【症状】

体内の水分が急激に少なくなることによって、のどの渇き、唇などの乾燥、発熱、頭痛、めまい等の症状が現れる。症状が進行し、もうろうとする、けいれんなどの症状が現れる。血圧が低下し、血流が悪くなることによって、血栓が生じやすくなるため、その予防は極めて重要である。最悪の場合、命にもかかわる。寒冷環境下では、排尿の回数が増える。また、寒冷環境では空気が乾燥していることが多く、皮膚や口やのどなどから、水分が多く蒸発する。また、のどの渇きが認識されにくいため、脱水症状が進行しやすくなる。

【対処】

スポーツドリンク等を幾分薄めて使用し、一回の補給量を少なくし、３０分～１時間間隔で回数多く補給する。対策としては、のどの渇きを感じる前に、定期的に、少しずつ水分と

ミネラルを補給すること。濃いお茶やコーヒー、ビールなどは、カフェインやアルコールを含み、これらは利尿作用があるため、水分が余計に排出される。そのため脱水症の対策としては不適。

低温やけど

【症状】

カイロなど体温より高い温度のものを長時間肌に当てることによって発生する。赤っぽい斑点や水ぶくれなどが特徴である。摂氏 46 度の熱源なら 1 時間半でやけどを起こすが、低温であるため、熱さや痛みを感じにくく、見た目よりも深くまで損傷が進んでいることがあり、放置され、重傷化しやすい。

【対処】

カイロを直接肌に貼らない。また、長時間貼りっぱなしにしない。この他、電気あんかや湯たんぽ、電気敷毛布、電気カーペット等を使用する場合にも注意が必要である。

ぜん息、気管支炎等

【症状】

寒冷な空気にさらされることによって、ぜん息や気管支炎の症状が悪化することがある。心臓血管疾患のある方は、寒冷な空気を吸入することによって、気管支収縮と血管けいれんが生じることがある。

【対処】

気管に寒い空気が入らないようにマスクなどをする。また、ぜん息経験がある人は無理な作業をしないように注意喚起する。咳などの症状が出る場合は作業を速やかに中断する。

インフルエンザ

【症状】

空気の乾燥した寒冷期の締め切った室内で感染しやすい。摂氏 38～40 度の高熱が突然でるのが特徴であり、さらに、倦怠感、筋肉痛、関節痛などの全身症状も強く、これらの激しい症状は通常 5 日間ほど続く。また、気管支炎や肺炎を併発しやすく、重症化すると脳炎や心不全を起こすこともあり、体力のない高齢者や乳幼児などは命にかかわることもある。また、集団感染の発生の例も多いので注意が必要。

【対処】

必要に応じ、予防接種を受けるほか、栄養と休養を十分にとること、適度な温度、湿度（50～60%）を保つこと、マスクを着用すること、手洗いとうがいをするなどの対策が考えられる。インフルエンザにかかった可能性がある場合は、医師の診察を受けて活動を中止する必

要がある。集団感染の防止のための措置をとることが必要である。

一酸化炭素中毒

【症状】

締め切った空間の中でストーブなどの暖房器具を用いる場合、一酸化炭素中毒が発生しやすい。症状は一酸化炭素の濃度と時間によって異なるが、初期段階では、頭がフラフラする、顔が火照る、などといった症状が見られる（風邪に似ている）。さらに、頭痛やめまい、吐き気などが起こり、意識障害や意識消失へと重症度が増す。高濃度の場合、自覚症状のないまま死亡することもある。

【対処】

暖房中にこまめに換気する。室内の空気を汚さない暖房器具を選択することで防ぐことができる。また、頭痛やめまい、吐き気など初期症状を見逃さないようにする。特に就寝時には注意すること。なお、車中泊は論外である。

脳卒中（脳梗塞、脳出血など）

【症状】

寒冷環境下では、血管が収縮して血圧が高くなる傾向にあり、脳梗塞や脳出血の危険がある。急に倒れて意識がなくなったり、半身のマヒが起きたり、ろれつが回らなくなったりする症状が起きることがあり、重い場合、死亡することもある。特に高血圧、高脂血症、糖尿病などの方々は注意が必要である。

【対処】

急激な血圧上昇を防ぐために、暖かい部屋から出るときは服装（特に頭部）に留意する必要がある。また、血圧の高い人は、寒冷環境下での激しい作業は減らすことが望ましい。特に、トイレや脱衣場には注意が必要。

冠動脈疾患（狭心症、心筋梗塞など）

【症状】

狭心症は、心臓の筋肉に血液が十分供給できない状態をいい、締め付け感や圧迫感を伴う。さらに、心臓の筋肉が壊れ、心臓の機能が損なわれることを心筋梗塞という。狭心症から心筋梗塞に進むことが多い。特に、寒冷環境下では心臓に負担がかかるため、急性心筋梗塞が起こりやすい。症状としては、冷や汗、胸への締め付け感、吐き気などがある。心臓の機能が損なわれ、最終的には心停止・死亡することもある。

【対処】

糖尿病や高血圧など慢性疾患の人以外でも、喫煙者や高脂血症の人などは、暖房器具による乾燥に注意し、水分を十分に摂取する必要がある。また、身体が急激な温度変化にさらされないように留意して、寒冷環境下での激しい作業は減らすことが望ましい。ＡＥＤの設置

場所や使い方を確認しておくこと。

薬の副作用

【症状】

よく知られている例としては、インシュリン、精神安定剤、風邪薬などがある。糖尿病でインシュリンによる治療している人は、寒冷に対してより敏感になっているため、局所性の凍傷にかかる危険性が増大する。精神安定剤や風邪薬は眠気を催すことがあり、低体温症を防げなくなる可能性もある。

【対処】

薬の飲用を避けるようにする。活動中に眠くなる場合は速やかに作業を中断する

リウマチ等

【症状】

寒冷環境下での作業で筋肉や関節を局所的に使った場合、発病に結びつくことがある。痛みやこわばりなどの症状を引き起こす可能性がある。進行すると、関節が壊れたり、筋肉が縮んだり固まってしまう場合がある。

【対処】

準備体操などを十分に行うようにする。痛みを感じる場合は、速やかに作業を中断する。

（２）適切な情報提供

健康リスク自体を把握するだけでは、リスクの回避にはならない。参加を希望する除雪ボランティアに、当日プログラム等を伝える段階で、前述したものほど詳しい必要はないが、健康リスクそのものについて伝えておくことが望ましい。

また、除雪ボランティアに限らず、雪かき道場に協力する地域住民にも同様の説明があったほうがよい。毎年のことで、身体が慣れていると思われるであろうが、意識している以上に身体への影響が大きくなる場合もあるため、事前の説明は必要である。

健康リスクは装備によってある程度回避することができる。参加する除雪ボランティアが自ら準備することで、意識を高めることにもつながる。

①装備に関する情報提供

寒冷地域といっても地域によって状況が異なるため、必要と思われる用具を現地に確認するとよい。装備は活動地域の自然条件などに適したものを選ぶのが望ましい。具体的な写真や内容について紹介した資料を作成し、事前に伝えることで、参加者が準備しやすくなる。

装備・用具については、体温低下による身体への影響をできるだけ抑えるために、身体を冷やさないように配慮する必要がある。また、寒冷対策として衣類を着込むことで通常より身体のまわりに湿気がたまりやすく身体を冷やすため、着替えを準備は必ず伝えるべきである。

着替えとして、下着、シャツ、タオル、手ぬぐい、手袋などを用意します。湿気を感じたら、あるいは活動後ただちに取り替えられるよう複数用意し、出し入れしやすいように準備しておくとよい。

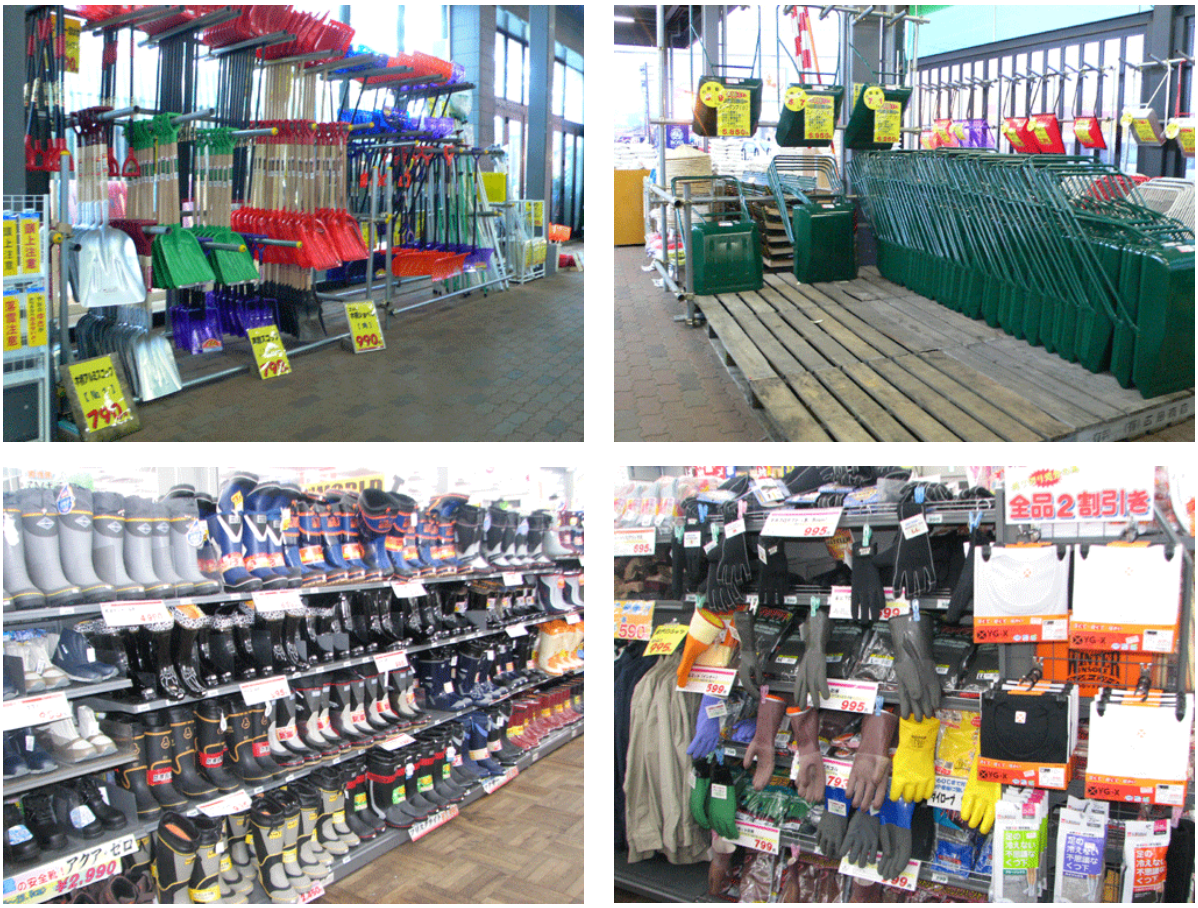
現地では、衣類などを乾燥させることができない場合が多いので、十分な量の着替えが必要なことも伝えておくとよい。（特に靴下、肌着など）。

また、装備・用具は、汚れたり、破れたり、壊れたりする可能性があるためそのことを伝えておく必要もある。高価な装備･用具を守るために自分がケガをしては本末転倒といえる。

【参考：現地購入ツアー】

雪国の生活にあった装備を揃えるためには、現地のホームセンターで購入するのが望ましい。地域によっても品揃えや装備の種類にも違いがあり、現地のことを知る一つの機会になる。

ただし､降雪状需要増加や物流状態などの影響により購入出来ない場合が考えられるため、事前の確認が求められる。状況によって、入手が困難な物品は希望をとり、購入しておく必要もあるであろう。



写真：ホームセンターの様子

想定される装備について

衣類（上半身）

- 温度調節が容易に出来るように、薄手のものを重ね着することが望ましい。
- 活動場所によっては、着替える所がない場合がある。そのため、背中にタオルを入れ、汗をかいたらすぐに取り替えるようにすると、着替える手間も省け、体温調節も簡単にできる。
- 肌着も含めて服の素材は、熱を逃がさず、肌から出る水分（水蒸気）を効率的に外部に排出できるもの（化学繊維等）を選ぶとよい

- 重ね着の基本スタイルの例としては次のようなものがある。
  - ✓ 肌着としては、速乾性のＴシャツなど
  - ✓ 肌着の上には、温度調整機能に優れている長袖襟付きのシャツ（注）
  - ✓ 長袖襟付きシャツの上には、保温のためのフリースなど（注）
  - ✓ 一番上に防水・防風のために薄手の上着（ウィンドブレーカーやヤッケなど）（注）
  - ✓ 上着は、保温のため、腰のあたりで絞ることができるもの
  - ✓ 上着は、安全のため、目立つ色のもの

  （注）天候や活動の状況によって重ね着の種類、枚数を調整。

- スキーやスノーボードのウェアは、一見良いように見えるが、温度を調整することが難しいものも多くある。動きが制約されることもあり、疲れやすいという短所もあるので気を付ける必要がある。
- **マフラーは、首に巻き付き事故の原因となる場合がある**。首の保温は、ネックウォーマーがよい。
- 雪環境であってもみぞれや雨に変わることもありますので、上着は防水性があるものが好ましい。

衣類（下半身）

- 温度調節が容易に出来るように、薄手のものを重ね着することが望ましい。
- 肌着も含めて服の素材は、熱を逃がさず、肌から出る水分（水蒸気）を効率的に外部に排出できるもの（化学繊維等）を選ぶと良い。

- 下半身の重ね着の基本スタイルの例としては次のようなものがある。
  - ✓ 肌着の素材は速乾性のもの
  - ✓ 肌着の上には、保温の機能をもった速乾性素材のタイツ（ズボン下など）
  - ✓ タイツ（ズボン下など）の上に保護のためにトレパンなど
  - ✓ トレパンなどの上に保温・防水のためオーバーパンツなど
  - ✓ オーバーパンツは、暑くなった場合やトイレのことを考え、容易に脱ぐことが出来るもの

・ 凍傷を防ぐために厚手の靴下を着用するとよい。また、濡れてしまった後では手遅れですので、湿気を感じたら取り替えるようにする。

手袋類

・ 雪環境下の防災ボランティア活動に手袋は必須であり、保温性・防水性に優れたものがよい。
・ 屋外で長時間作業等を行う場合は、透湿性に優れたものがよい。例外的に雪処理作業を行う場合は、保温性のある裏地付きゴム手袋など。（雪処理作業用ゴム手袋などの表示があるものを選ぶとよい。また、汗で濡れた場合や不意に濡らしてしまった場合を考え複数枚用意が必要。）
・ 活動に差し支えない範囲で、ややゆったりめのサイズのものを選ぶ。

参考画像：保温性のある裏地付きゴム手袋

帽子等

・ 体温低下を防ぐためにできるだけ帽子をかぶるようにする。その際、帽子は風を通さないものがよい。また、耳や首まわりを冷気や濡れから保護するためにイヤーマフラーやネックウォーマーを活用するのが望ましい。
・ 晴天や薄曇りの昼間屋外での作業では、雪の反射によって目を痛めることがある（雪目）。このためにもゴーグルやサングラスなどによる保護も必要。
・ 凍結路等を移動することが考えられる際には、高齢者や慣れていない方は、転倒に備え、後頭部を保護するヘルメットを着用することもよい。
・ 例外的に雪処理活動を行う場合は、頭部が冷えることで、判断などが鈍くなるおそれがあるため、ニット帽などで防寒することが求められる。その際、汗を吸収できるように、手ぬぐいなどを巻いた上からニット帽を被る場合もある。

履物類

・ 足首よりも浅い雪の場合は、動きやすい「スノトレ（雪道に特化した運動靴）」を選ぶと良い。足首よりも深い雪の場合や深さが分からない場合は、口が絞れる、保温性のある長靴が良いでしょう。他人の長靴と間違え易いため目印を付けておくとよい。

参考画像：中敷きが分かれている長靴（左）、中敷きがボアの長靴（右）

装備の調整

・ 外気温は時間や天候によって変化し、また作業の前後では体温にも違いがあるため、継続的、意識的に衣類の調整を行う必要があります。雪環境下での活動は、想像以上に汗をかく。また、防寒具を着ての重労働になるため、特に体温調節に気を配る必要がある。

・ 作業後には、また作業途中でも衣服に湿気を感じるようになった場合は、直ちに着替え、体を冷やさないことが大切である

その他携帯するもの

・ 常備薬がある方は、多めに携帯し、身に着けるようにする。また、コンタクトやメガネの方は予備のメガネを用意するとよい。

・ 健康保険証のコピー、ボランティア保険の受領証のコピーも念のため用意することが望ましい。

・ 自分自身の緊急連絡先、血液型、アレルギーの有無・種類、既往症などを記入したカードを身に着けるよう伝えておくとよい。

・ 使い捨てカイロ、バンソウコウ、消毒薬、包帯、うがい薬、風邪薬、頭痛薬、胃腸薬、ビタミン剤、衛生用品、日焼け止め、リップクリーム、ハンドクリームなどを必要に応じて用意しましょう。

③参加を通じた気づき

健康面へのリスクについては、事前の情報提供だけではボランティアに十分に伝えることはできない。なにより、雪環境そのものを知らない、経験がないボランティアがいることが想定されるためである。また、スキーやスノーボードなどの経験はあったとしても、除雪作業については経験があるとは限らない。除雪作業は予想以上に作業量があること自体知られていない可能性がある。

また、地域住民については「知っている」「自分は大丈夫」と思っていることがあるため、除雪ボランティアなどに当日説明するのを通じて、意識してもらう必要がある。

そのため、雪かき道場への参加を通じて、除雪ボランティアや地域住民に知ってもらうことが大事である。プログラムでは、「重労働＝汗をかく」ということ自体を体感してもらうことがなにより大事なことであると思われる。もちろん、その回避策や対処方法もあわせて説明することが求められる。

④健康管理

①～③までの回避対策を行った上で、雪かき道場の実施期間中は、自らの健康管理の意識を高めてもらうように、企画運営者から、除雪ボランティア・地域住民への周知、徹底が求められる。

具体的な健康管理の方策は下記のとおりとなる。

- 準備運動
- 時間の管理と適切な休憩
- 適切な食事
- 水分とミネラル[1]の確保
- ケガや病気の防止・対処
- 健康状態のチェック

これ以降、具体的な回避方策についてとりまとめた。これらは、一方的に除雪ボランティアや地域住民に委ねるのではなく、**企画運営者も配慮方策をプログラムに組み入れていくことが望まれる。**

[1] ナトリウム、カリウムなど身体が必要とするイオン（電解質）。市販のスポーツドリンクやアルカリイオン飲料を数倍に薄めたものや、家庭等でつくられるレモネードに塩少々をいれたものでも摂取できる。

想定される回避策

準備運動

・ 外に出た直後はすぐに激しい活動をせずに、必ず、準備運動を十分に行ったほうがよい。（急激な気温の変化に体を対応させるため）また、運動量が少ない活動の場合でも必ず行ったほうがよい。
・ 寒冷環境下では筋肉、関節、腱が硬くなるため、首、手首、足首、股関節、腰等を動かすとよい。

【時間の管理と適切な休憩】

・ 身体への影響を考えると、作業を一定時間以上続けることは避けたほうがよい。例えば、１時間に１５分程度は休憩をとるようにしたり、疲労度に応じてさらに休憩時間を延長したり休憩回数を増やすようにするのが望ましい。
・ 自分の体力を過信せずに、声を掛け合って、きちんと休憩を取ることが大切。
・ このため、交代で休んでいる方が、タイムキーパー役を行うことも考えられる。
・ また、休憩場所は、みんなで使う場所なので常に整理、整頓、清潔を保つようにする。
・ １日の活動時間は１時間とし、昼食休憩を含めて６時間以内を目安とする例もある。
・ 明るいうちに戻れるように、時間に余裕を持って活動を切り上げる（日没後は急速に気温が下がること、視野が悪くなること、道路が凍結する可能性もあること等が考えられる。

【適切な食事】

・ 食事は各自が確保し、現地や受け入れ先の負担になることを避けるのが常識。
・ 寒冷環境下における作業は、多くのエネルギーを必要とするため、食事は非常に重要である。朝食は、必ず活動前に摂り、昼食も抜かず、食事抜きで活動することのないようにする。可能であれば、食べ物は余分に持って行くことが望ましい。
・ 持参した食事は、温かい場所におくと痛む場合がありますので、清潔で冷涼な場所に保管することが望ましい。

【水分とミネラルの補給】

・ 脱水症の防止のためにも、食事の際に、水分とミネラルをキチンととったほうがよい。
・ 寒冷環境下では、脱水症状が進行しやすくなる。このため、休憩のたびに水分とミネラルを適量とるようにする。水分をとる際には暖かいものが望ましい。濃いお茶やコーヒー、ビール等は、利尿作用があるカフェインやアルコールが含まれているため不適。

・ 水分をとることで、トイレの回数が増える可能性もある。トイレを我慢するのは健康リスクが高まるため、トイレに行きやすくするため、できるだけ活動場所の近くに確保することが望ましい。休憩の度にトイレに行くことを呼びかけるのが望ましい。

・ ボランティアを受け入れる窓口がある場合、その受入担当者が、事前に活動依頼があったところでトイレが借りられるよう相談しておくことよい。

ケガや病気の防止・対処

・ 活動中、ケガや病気を発生しないように呼びかける。また、ボランティア同士で声をかけあるようにする。
・ 気象情報や天候の変化には十分に注意する必要があり、警報などが発表された場合には、活動を中止することも考えられる。
・ お互いに体調や行動の確認を行うことができるように、活動中や移動する際は、基本的に２人以上で行動するのがよい
・ ボランティア活動に没頭するあまり、自己の体調の変化に気づかないことがある。天候など周囲の環境のささいな変化にも留意することがよい。状況変化に応じて、作業を中止することは、現地に余分な負担をかけないためにも必要なこと。
・ 活動中に体調の不調を感じたときは、ただちに活動を中止し、リーダーに報告する。その後、すみやかに活動から離れて医師や看護師の診察を受けるようにする。また、活動中にけがをした場合も、傷口の消毒や手当は迅速に行う。破傷風[2]（死ぬ可能性もある病気です）の危険がある。
・ ボランティア活動後、帰宅してから身体に異常を感じた場合は、医師の診察を受けるようにする。

[2] 破傷風は潜伏期間があり、活動後に発症する可能性があります。

健康状態のチェック

- 活動の前、またその後に体調をチェックすることで、自らの健康状態に意識することになる。これによって、自分の年齢、体力、健康状態への過信による過度の作業を抑制することができる。
- 自らの健康状態を意識するために血圧を測定する場所を設けた例もある。

参考：活動当日の健康チェックカードの例

氏名	
住所	
電話番号	
緊急時連絡先	
年齢	
ふだんの血圧	／
心臓病	ある　・　ない
治っていないケガ	ある　・　ない
その他の病気	ある（　　）・ない
血液型	A　・　B　・　AB　・　O
・除灰作業の重労働に従事される方の健康状態のチェックにご利用いただけます。	
・高血圧の方、心臓病の方、その他病気の方々は、重労働の作業をお断りすることもございますが、なにとぞご了承下さいませ。	
・治っていないケガがある場合は、泥水に傷口が触れて化膿するなどの可能性がありますので、医師、看護婦、保健婦に相談してください。**重労働の作業をお断りすることもございますが、なにとぞご了承下さいませ。この場合、軽作業をお願いすることがあります。**	
・作業を行う際、自分の周りの方がぐったりしていたり、へたりこんでいたりしていないか、お互いに注意しましょう。	
・健康チェックで異常がない方でも、作業中、身体の不調がございましたら、直ちに作業を中止し、周りの者に声をかけて下さい。	
・何か、異常やトラブルなどがありましたら、直ちに作業チームのリーダーに報告してください。	

出典：「災害ボランティアの安全衛生対策マニュアル　ＶＥＲ４.１」

（www.rescuenow.net/other/anzen_manual_ver4.pdf）

3　環境整備面への対処

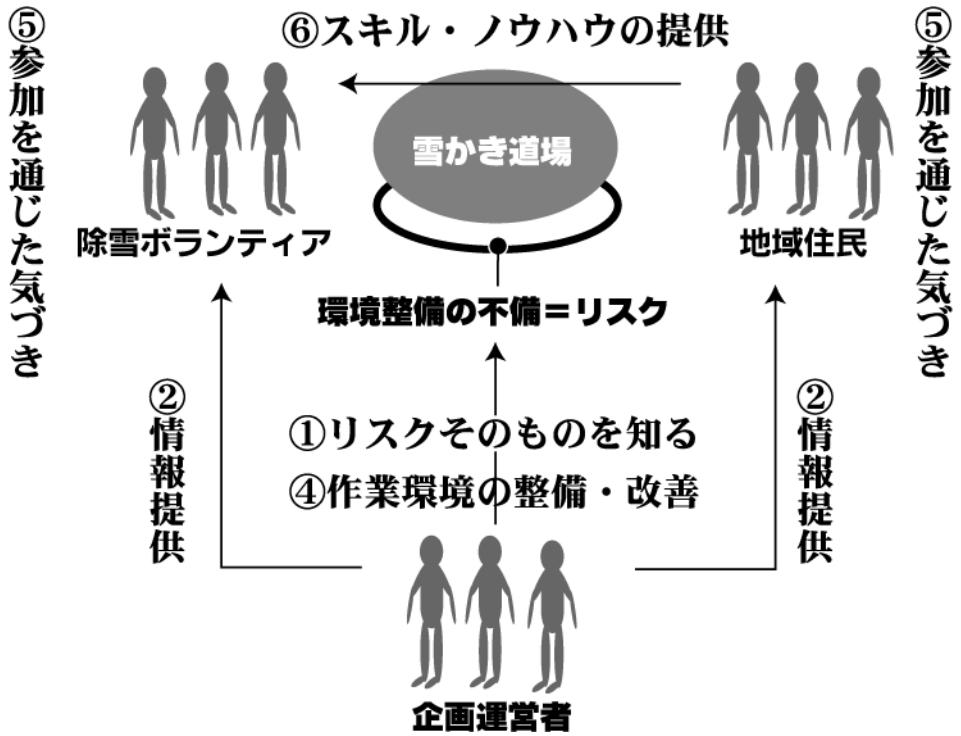
除雪ボランティア活動が行われる環境は､除雪ボランティアにとって不慣れな環境であり、また、けがや事故が起こりやすい環境であると言える。また地域住民にとっては、毎年経験しているが､「慣れ」による配慮不足もリスクと言える。

環境整備の不備については、企画時点から当日運営に至るまで、企画運営者による「安全な環境整備」によって回避することができる。除雪ボランティア・地域住民自らが意識をして、回避するという手段もあるが、それだけでは回避できない点もあるため、企画運営者の配慮や工夫により、環境整備の不備を回避することが望ましい。

環境整備の不備の回避は、大きく５つのステップにより、対処することが考えられる。

①リスクそのものを知る
②情報提供
③作業環境の整備・改善
④参加を通じた気づき
⑤スキル・ノウハウの提供

詳しい回避対策については、次ページ以降に整理する。



図．環境整備の不備の回避

健康リスクの回避同様、参加者へのアンケート調査などを行い、回避対策自体の検証や評価なども必要であろう。プログラムや作業量によって対策が変わってくることも考えられるため、実施した対策自体の情報共有、ブラッシュアップされることが期待される。

（1）リスクそのものを知る

企画段階において、雪かき道場等の除雪ボランティア活動を行う作業環境において、どのようなリスクがあるのか、企画運営者自身が知ることが求められる。雪国では当たり前のことでも、地域外からやってくるボランティアは知らないこともたくさんあると思われる。

下記、降雪環境を中心に、リスクとして考えられるものを整理した。

屋根からの落雪

・ 屋根につもった雪はとてもすべりやすくなっているため、屋根には「雪どめ」が取り付けられている。しかし最近では雪を屋根からすべり落とす「落雪式住宅」が増えており、庇（ひさし）の近くを歩くことは大変危険です。（屋根からの落雪は予想以上に遠くまで届く。）

☆ 屋根の雪を「雪」と考えてはいけない。重たく、巨大な氷の塊で、直撃されれば命を落とすことになりかねない。次の雪庇も同じ。

雪庇（せっぴ）

・ 軒先から雪がせり出ている状態を「雪庇」という。この雪庇の落下による事故も、毎年発生している。そのため、狭い路地や軒下の周辺には近づかないようにする。

写真提供：長岡技術科学大学　上村靖司氏

つらら

- つららは根本も含め、重量のある氷の塊です。高所から、重量物が落下するため大変危険である。庇（ひさし）の下を歩くことは大変危険ですので近づかないようにする。
- 遊びでつららを落とす人がいますが、大変危険な行為である。ガスの配管などを壊す可能性がある。

側溝・水路などへの落下の危険

- 雪が積もったばかりの道路では、側溝・水路などがわかりにくくなっている。
- 積雪の多い地方では、道路との境界を矢印や反射板などで示しているので、それを目安にするとよい。ただし、すべての道路に目印があるわけではないので、誤って落下しないように注意が必要である。
- かなり深さのある側溝・水路などもあり、水が流れている場合さらに危険性が増す。

路面の状況

- 雪環境下では、道を歩くだけでも危険（転倒、落雪、車との接触等）を伴うことがある。
- 降雪や気温によってさまざまな路面状況となる。

狭い道幅

- 道路の雪や、住宅敷地内の雪が路肩に溜まって、山のようになっている事がある。そのため、道幅が狭くなり、運転や歩行がしにくくなる。
- また、歩行者が自動車をよけるために雪の山に踏み込んだ際、側溝・水路などに落下するおそれがあるため、十分な注意が必要。

道路横断などの留意点

- 道路を横断する際は、大変滑りやすくなっているので注意する必要がある。
- また、歩行者は運転者からは見えにくくなっているため、無理な横断は避ける。さらに、自動車がスリップして思わぬ方向から突っ込んでくることもあるため、十分に警戒する必要がある。

視界や足下が悪い場合

- 路肩に溜まった雪は、人間の身長よりも高くなる場合もあり、見通しが悪くなる。また、吹雪いている時は 1m先も見えない場合もあり、方向感覚が失われることがある。
- 徒歩による移動はなるべく避けるようにする。そのため、地元ボランティア活動関係者の自動車に同乗させていただくことなどがある。
- なお、吹雪いて視界が極度に悪い場合は、安全な場所で移動せずに天候の回復を待つようにする。
- 防寒着などにより視界の幅が狭くなるほか、音も防寒着などにより聞こえにくくなる。行動する場合、周囲の状況を十分に確認する。

除雪車などの危険

- 毎年、除雪車による巻き込みによる死亡事故や深刻な事故が発生している。
- 除雪車からは、大量の雪が勢いよく放出され埋まるおそれがある。このため、作業中の除雪車には、決して近寄ってはいけない。
- 最近では、一般家庭にも小型除雪機械が普及している。通過するまでは、立ち止まって待つようにする。

写真：小型建機・除雪機

（2）情報提供

健康リスクの回避と同様、雪環境におけるリスク自体を把握するだけでは、リスクの回避にはならない。環境整備の不備は、企画運営者によって、おおよその改善はできるものの、除雪ボランティア希望者への情報提供も必要である。例えば、具体的な作業をイメージできるように、まず作業現場の写真などを紹介することが考えられる。

具体的なリスクを確認するためには、事前下見は必須であると考えられるが、限られた時間内では十分に情報の把握をすることができない。雪かき道場に協力する地域住民から、普段の状況や定期的に降雪状況なども確認しておくことが望まれる。地域住民へ確認することで、地域住民自らも作業環境のリスクについて意識することにもつながる。

参考：自動車について・現地への移動手段

公共交通機関がある場合は、原則として、公共の交通機関を利用するようボランティアに伝えておくのが望ましい。

しかし、公共交通機関がない場合は、例外的に自動車を利用せざるえない場合もある。なお、その場合、必ず、現地に駐車場を確保しておく必要がある。

自動車を利用する場合は、下記の点について事前に伝える必要がある。

- 寒冷地域での運転経験がなければ運転しない。
- 車中泊は、低体温症によって命にかかわるおそれがある。
- エンジンをかけたままで車中泊や長時間停車すると、一酸化炭素中毒やいわゆる「エコノミークラス症候群[3]」によって命にかかわるおそれがある。特に、積雪環境では、車の周囲の雪の壁により、排気ガスがより滞留しやすくなる。車庫など閉鎖環境では、特に危険である。
- 積雪がある場合、原則として余分な自動車を停めるスペースはない。また、安易に路上駐車することは、積雪で道路幅が狭くなっているため道路交通、現地の除雪活動の妨げになる。そのため、訪問する先に対して事前に連絡をし、駐車する場所を確保してもらう必要がある。
- 寒冷地域で自動車を利用する場合には、自動車の装備の確認が必要となる。寒冷環境下では、バッテリーの動きが鈍くなりエンジンがかかりにくくなるなど、他の地域とは異なったトラブルが発生するため、自動車に寒冷地仕様が設定されている。また、各メーカーによって内容が異なるため、装備の内容について確認しておくとよい。
- ガソリンや軽油も標準のものでは凍ってしまうことがあるため、現地で購入するとよい。ラジエーターやウォッシャータンクの中身も不凍液と交換する。ワイパーも寒冷地用に交換する必要がある。
- 雪用タイヤの装着が必要となる。また、ブースターケーブル・ミニシャベル・古毛布・

[3] 長時間、同じ姿勢を保持した結果、特に下肢の圧迫と水分不足により、「血のかたまり(=血栓)」ができ、これが血管を通じて肺の「血管を詰まらせる（=塞栓)」ために、深刻な状況になり、場合によって死にいたるもの。なお、これが、脳に運ばれれば「脳塞栓」、心臓に運ばれれば「心筋梗塞」となる。

アイススクレーバー（窓ガラスの氷を削る器具）・ウェス（内側からの曇り拭き）を必ず持つようにする。

- 積雪環境では、一般道であっても、除雪車や様々な重機が往来しますので、特に注意する。（重機のオペレーターからは、周りの車が見えにくいこともある。）

（３）作業環境の整備・改善

リスクの把握、情報提供を行った上で、具体的な作業環境の整備・改善を行い、できるかぎり当日までに回避できるものは対処しておくことが望まれる。

①危険箇所の周知

「（２）情報提供」でもふれているが、作業を予定している環境については、事前の下見を十分に行うことが求められる。

危険箇所、ボランティアの移動ルート、動線などを地図に落とすことなどし、企画運営者・当日スタッフ全員が共有することが望まれる。

危険と思われる箇所を参加者に知らせるため、また、意識して活動ができるように、直前までにはポールを立てるなどの工夫をすることが考えられる。

②安全管理者の設置

企画運営者、当日スタッフの対処方法を事前に決めておくことが望まれる。リスクを回避するためには、作業全体を見守り、安全管理の対処ができる「安全管理者」を複数名決めておくことが望まれる。責任者・リーダーだけでは、ボランティアや地域住民の対応に追われることで、対応が不十分になる可能性もある。

また、けがや事故が起きた場合の対処方法、緊急連絡先や救急受付のある病院なども決めておくことと、そのような情報をスタッフ全員で共有しておくことが望まれる。

③天候の確認

事前の確認だけではなく、当日直前、そして当日の天候については把握しておくことが望まれる。特に直前に大量の降雪があった場合、下見で確認した危険箇所以外にも危険箇所ができている場合もある。

作業を行う時期の雪の降り方や雪質など、参加する地域住民から話しを聞いておければ、配慮すべき事項や、具体的な対処方法を考えることもできる。

（4）参加を通じた気づき

作業環境は実際に現場で確認することで、はじめて危険性や回避方法を認知することができると思われる。特に降雪環境になじみのないボランティアには、事前の情報提供だけで十分に理解できることができない。

そのため、雪かき道場などの当日プログラムでは、座学によるリスクの説明に限らず、体験することもプログラムの中に盛り込むことが望まれる。

当日参加する地域住民からすれば、「当たり前」のことであったとして、あえて「当たり前」のことを説明することで、意識をして作業をしてもらうことにつながる。

①危険を知る機会をつくる

まず、「なにが危険であるのか」「なぜ危険であるのか」をボランティアに知ってもらう機会をつくることが求められる。今年開催された「雪かき道場（初級者編）」では、除雪作業の前に、かんじきを履いて、全員作業環境の下見をしたが、このような下見はリスクを回避するためのプログラムとして有効であると思われる。

写真や映像で、その危険を伝えるのも一つであるが、例えば、「雪庇」「屋根の雪」を実際に落としてみることで、落雪の破壊力や軒下だけでなく、その周辺も危険があることも伝えることなどが考えられる。

写真．雪庇（せっぴ）

②慣れる機会をつくる

初心者が、「こういう動作をすると滑る」「こういう場所が危ない」と自らが気づき、意識する仕かけが求められる。

①でもふれたが、作業環境の下見をプログラムに組み込むように、すぐに作業に移るのではなく、実際に安全な場所でスコップを使ってみる時間を設けることも考えられる。今年の雪かき道場で行った「階段づくり」なども有効なプログラムの一つと思われる。

また、除雪機などの建機を使う場合は、安全管理者の立ち会いの下、どういった危険があること自体紹介する時間を持つことが考えられる。

（5）スキル・ノウハウの提供

雪の扱い方を一番知っているのは、その土地の雪質なども知り、毎年のように経験を積んできた地域住民である。

その地域住民から、除雪ボランティアと一緒に作業を進め、住民の持つスキル・ノウハウを具体的に伝えることは意味がある。手とり足とり丁寧に指導する時間をつくることで、ボランティアも意識して作業を行うことになる。

作業に限らず、一緒に話しをする時間を意図的に設けることで、過去の除雪経験などを聞く機会になる。

このようなに教える地域住民がボランティアに伝える機会ができれば、一般の雪処理作業時にも意識した作業をすることにつながると思われる。

写真：かんじきのはきかたを学ぶ

（６）その他の対処

①専門家からのアドバイス

これらの対処は企画運営者だけで考えるのは望ましいとは言えない。けがなどの対処を考えるのであれば、地元の医師・看護師に事前に話しを聞いておくことや、可能であれば参加してもらうことなども考えられる。また、重機や除雪機を使う場合は、その専門家が立ち会うことを前提に準備することが望まれる。

冬期は、主要道路では除雪車による除雪作業を行っている場合もある。雪かき道場などの企画内容を、市役所や役場にも伝えておくことが望まれる。

②保険への加入

具体的なリスクの対処ではないが、各種保険への加入も検討が必要である。

ボランティア活動をする際は、個人もしくは企画運営者で、ボランティア保険に加入するのが一般的になっている。除雪作業の時間が極端に短い場合であっても、ボランティア保険の加入はする必要がある。

ボランティア保険は、個人のけが、疾病にしか適応できないため、スコップ等でけがをさせてしまった場合の保険や、落雪等によって器物や個人所有物の損害保険への加入も必要と思われる。

③受講後の活動留意点

「雪かき道場」の場合、研修終了後に「修了証」を発行される。これはボランティアがその後活動することができることを保証する意味合いもある。しかしながら、この道場に参加したからと言って、自由にどこでも活動ができるわけではないことをきちんと伝える必要がある。「雪かき道場」のように、安全面への配慮をした活動環境と一般の除雪作業が必要な環境には違いがあることを伝えておくべきである。特に少人数で作業をすることがないように喚起が必要である。

4　安全衛生に関する留意点

この項では、リスク回避対策について、下記の企画運営の流れにそって、チェックすべき項目とその具体的な方策をとりまとめる。

- 企画時点
- 現地下見
- 事前調整（広報）
- 事前準備
- 当日オリエンテーション
- 活動中
- 活動後

（1）企画時点

【チェック項目】

- □ 企画の方針の明確化
- □ 活動場所の選定
- □ 全体コーディネーターの人材確保
- □ 準備期間を十分に設ける

①企画の方針の明確化

雪かき道場では、上級者、中級者、上級者にわけて実施されたが、除雪のスキルを身につけることに重視したプログラムのほか、地域住民との交流を重視したプログラムなど、目的によっては、除雪ボランティア活動の方針、安全衛生方策は違ってくる。

安全衛生方策を進めていく中で、企画の方針に立ち返り判断することも出てくるため、企画の方針を明確にすることが求められる。

②活動場所の選定

降雪状況や地域住民等の対応、協力など総合的に判断し、活動場所を選定することが求められる。活動場所が確定すれば、その状況にあわせて参加人数等を絞り込むことができる。

活動場所の選定にあたっては、企画運営者だけで検討するのではなく、行政や地域住民等の意向も踏まえて確定することが求められる。

③全体コーディネーターの人材確保

除雪ボランティア活動の企画を進めるにあたっては、全体のコーディネートができる人材を確保する必要がある。ボランティアの受け入れ、イベント等の経験がある人材であることが望ましい。また、地域住民の協力なしに除雪ボランティア活動はできないため、地域住民と丁寧なコミュニケーションがとれる人材が求められる。

④準備期間を十分に設ける

実施までの時間はできるかぎり 2 ヶ月以上の期間を持つことが望まれる。

当日プログラムの検討や地域住民等との調整、参加募集、事前の情報提供や準備はすぐにできるものではない。準備期間がないままでは、現地の状況など把握する時間もなく、環境整備の不備に気づくことが難しくなる。

また、準備期間を十分に期間を設けることで、降雪状況などを把握する余裕ができる。

（２）現地下見

【チェック項目】

- □ 危険箇所の確認
- □ 動線の確認
- □ トイレ･着替え場所･休憩場所の確保
- □ 医療施設等の確認
- □ 地域住民からの情報収集･天候の確認

①危険箇所の確認

活動する地域が確定したら、現地下見を必ず行い、危険箇所等を確認する必要がある。

特に下記の点については留意が必要であるため、現地で地図等と照らし合わせて、チェックすることが望まれる。参加者や当日スタッフに説明するために、写真撮影をしておくとよい。

- 屋根からの落雪
- 雪庇（せっぴ）：軒先から雪がせり出ている状態。
- つらら：重量のある氷の塊
- 庇（ひさし）の下
- ガスの配管
- 側溝・水路とその深さ、流水状況
- 路面の状況
- 狭い道幅
- 道路横断などの留意点
- 視界や足下が悪い場合（路肩に溜まった雪等）
- 除雪車・小型除雪機械

②動線の確認

危険箇所の把握とともに､ボランティア等の移動する際のリスクも想定し､安全な移動環境、動線についても想定しておく必要がある。

③トイレ・着替え場所・休憩場所の確保

健康リスクを抑制するためには、トイレや休憩の確保が必要である。また、参加する人数にあわせて、トイレの数も確認しておく必要がある。

活動場所からトイレまでの距離が遠くなると、トイレを我慢することも考えられるため、できるだけ近い場所で確保することが望まれる。地域住民など個人宅を借りる際は、十分に説明をしておくべきである。公衆トイレなどは冬期に使えない場合もあるため、使えるかどうか確認しておくとよい。

また、休憩場所は、暖かい暖房設備があること、十分なスペースや身体を休められるいすなどの有無など確認しておくとよい。

除雪作業は、重労働であり、汗をかくことが想定される。長時間汗をかいた下着などを身につけることや、雪などで濡れたままの状態で作業をすることは、健康リスクを高めてしまう。暖かい環境で着替えのできる場所を確保しておく必要がある。着替えスペースは男女別にするのが当然である。

④医療施設等の確認

緊急時に駆け込むことができる医療施設の場所と連絡先の確認が必要である。最寄りの医療機関までの移動距離や時間も確認しておくとよい。また、ＡＥＤなどの設置している場所のチェックもしておきたい。

単に施設の有無や距離を確認するだけでなく、医師や看護師にけがや疾病の際の応急手当や対処方法なども事前に相談しておくとよいであろう。

⑤地域住民からの情報収集・天候の確認

参加する地域住民に限らず、活動場所や降雪状況について、地域住民からの情報収集をしておくことが望まれる。情報収集は一度だけでなく、当日までに数回ほど、天候や降雪状況について聞いておくとよいであろう。

冬期は天候が変わりやすいため、当日までの１週間、当日の天気予報は丁寧に把握しておく必要がある。最近はインターネットによる天気予報も詳しくなっているため、チェックしておくとよいであろう。

（３）事前調整（広報）

【チェック項目】

□ 現地へのアクセス手段
□ 現地の情報提供
□ 装備の説明

①現地へのアクセス手段

公共交通機関がある場合は、原則として、公共の交通機関を利用するのがよいが、公共交通機関がない場合は、例外的に自動車を利用することになる。なお、その場合、必ず、現地に駐車場を確保しておく必要がある。

自動車を利用する場合は、以下の点について、ボランティアに説明をしておくとよい。

- 寒冷地域での運転経験がなければ運転しない。
- 車中泊は、低体温症によって命にかかわるおそれがある。
- エンジンをかけたままで車中泊や長時間停車すると、一酸化炭素中毒やいわゆる「エコノミークラス症候群[4]」によって命にかかわるおそれがある。特に、積雪環境では、車の周囲の雪の壁により、排気ガスがより滞留しやすくなる。車庫など閉鎖環境では、特に危険である。
- 積雪がある場合、原則として余分な自動車を停めるスペースはない。また、安易に路上駐車することは、積雪で道路幅が狭くなっているため道路交通、現地の除雪活動の妨げになる。そのため、訪問する先に対して事前に連絡をし、駐車する場所を確保してもらう必要がある。
- 寒冷地域で自動車を利用する場合には、自動車の装備の確認が必要となる。寒冷環境下では、バッテリーの動きが鈍くなりエンジンがかかりにくくなるなど、他の地域とは異なったトラブルが発生するため、自動車に寒冷地仕様が設定されている。また、各メーカーによって内容が異なるため、装備の内容について確認しておくとよい。
- ガソリンや軽油も標準のものでは凍ってしまうことがあるため、現地で購入するとよい。ラジエーターやウォッシャータンクの中身も不凍液と交換する。ワイパーも寒冷地用に交換する必要がある。
- 雪用タイヤの装着が必要となる。また、ブースターケーブル・ミニシャベル・古毛布・アイススクレーバー（窓ガラスの氷を削る器具）・ウェス（内側からの曇り拭き）を必ず持つようにする。
- 積雪環境では、一般道であっても、除雪車や様々な重機が往来しますので、特に注意する。（重機のオペレーターからは、周りの車が見えにくいこともある。）

[4] 長時間、同じ姿勢を保持した結果、特に下肢の圧迫と水分不足により、「血のかたまり(=血栓)」ができ、これが血管を通じて肺の「血管を詰まらせる（=塞栓)」ために、深刻な状況になり、場合によって死にいたるもの。なお、これが、脳に運ばれれば「脳塞栓」、心臓に運ばれれば「心筋梗塞」となる。

②現地の情報提供

天候（活動を予定している期間)、交通機関の運行状況、交通規制といった情報を事前に伝えておくとよいであろう。

ボランティアの意識を高めてもらうためにも、可能な範囲で、気象情報を把握しておくよう伝えておくことも考えられる。情報の入手先として、気象庁や民間気象会社のウエブサイトだけでなく、都道府県や政令市などが地域密着型の気象情報を発信している場合はそれもチェックすることが望ましい。

③装備の説明

衣類（上半身、下半身)、手袋類、帽子等、履き物類など装備については、できるだけ具体的な内容を伝えておくことが望まれる。現地で購入できればよいが、そうでない場合もあることも伝えるとよいであろう。

ウエブサイトなどで紹介する場合は、写真付きで紹介すると、準備しやすい。

【衣類（上半身)】

・ 重ね着の基本スタイルの例としては次のようなものがある。
  - ✓ 肌着としては、速乾性のＴシャツなど
  - ✓ 肌着の上には、温度調整機能に優れている長袖襟付きのシャツ（注）
  - ✓ 長袖襟付きシャツの上には、保温のためのフリースなど（注）
  - ✓ 一番上に防水・防風のために薄手の上着（ウィンドブレーカーやヤッケなど)（注）
  - ✓ 上着は、保温のため、腰のあたりで絞ることができるもの
  - ✓ 上着は、安全のため、目立つ色のもの

（注）天候や活動の状況によって重ね着の種類、枚数を調整。

【衣類（下半身)】

・ 下半身の重ね着の基本スタイルの例としては次のようなものがある。
  - ✓ 肌着の素材は速乾性のもの
  - ✓ 肌着の上には、保温の機能をもった速乾性素材のタイツ（ズボン下など）
  - ✓ タイツ（ズボン下など）の上に保護のためにトレパンなど
  - ✓ トレパンなどの上に保温・防水のためオーバーパンツなど
  - ✓ オーバーパンツは、暑くなった場合やトイレのことを考え、容易に脱ぐことが出来るもの

【手袋類】

・ 雪環境下の防災ボランティア活動に手袋は必須であり、保温性・防水性に優れたものがよい。屋外で長時間作業等を行う場合は、透湿性に優れたものがよい。例外的に雪処理作業を行う場合は、保温性のある裏地付きゴム手袋など。（雪処理作業用ゴム手袋な

どの表示があるものを選ぶとよい。また、汗で濡れた場合や不意に濡らしてしまった場合を考え複数枚用意が必要。）

・ 活動に差し支えない範囲で、ややゆったりめのサイズのものを選ぶ。

参考画像：保温性のある裏地付きゴム手袋

【帽子等】

・ 体温低下を防ぐためにできるだけ帽子をかぶるようにする。その際、帽子は風を通さな

いものがよい。また、耳や首まわりを冷気や濡れから保護するためにイヤーマフラーやネックウォーマーを活用するのが望ましい。

・ 晴天や薄曇りの昼間屋外での作業では、雪の反射によって目を痛めることがある（雪目）。このためにもゴーグルやサングラスなどによる保護も必要。

・ 凍結路等を移動することが考えられる際には、高齢者や慣れていない方は、転倒に備え、後頭部を保護するヘルメットを着用することもよい。

【履物類】

・ 足首よりも浅い雪の場合は、動きやすい「スノトレ（雪道に特化した運動靴）」を選ぶと良い。足首よりも深い雪の場合や深さが分からない場合は、口が絞れる、保温性のある長靴が良いでしょう。他人の長靴と間違え易いため目印を付けておくとよい。

参考画像：中敷きが分かれている長靴（左）、中敷きがボアの長靴（右）

【その他携帯するもの】

・ 常備薬（多め）
・ コンタクトやメガネの方は予備のメガネを用意
・ 健康保険証のコピー、ボランティア保険の受領証のコピー
・ 自分自身の緊急連絡先、血液型、アレルギーの有無・種類、既往症などを記入したカード
・ 使い捨てカイロ、バンソウコウ、消毒薬、包帯、うがい薬、風邪薬、頭痛薬、胃腸薬、ビタミン剤、衛生用品、日焼け止め、リップクリーム、ハンドクリームなど

（４）事前準備

【チェック項目】

- □ 装備、物品の確保
- □ 危険箇所の明確化、改善
- □ 緊急対応方法の検討
- □ スタッフミーティング
- □ 保険への加入
- □ 地域住民等の対応確認

①装備、物品の確保

参加希望者（ボランティア）だけで準備ができそうにない装備や物品があれば、事前に準備しておく必要がある。飲み物や昼食などの食事など、作業する地域で確保することが難しい場合は、人数分よりやや多めに購入しておくとよいと思われる。

飲み物はペットボトルなど容器以外に、紙コップなどを準備し、名前を書かせて、各自で管理させる方法も考えられる。紙コップにすることで適量を数回にわけて補給することができるため、健康リスクの管理にも役立つ。

②危険箇所の明確化、改善

現地の下見で確認した危険箇所は、わかりやすいように三角ポールなどを設置しておく必要がある。事前に説明しただけでは伝わりにくく、作業に集中していると、危険箇所を見落とす可能性もあるため、必ずしておくべきである。

③緊急対応方法の検討

緊急対応方法を検討し、資料にとりまとめておくことが望まれる。検討が必要と思われる点は下記の通り。

- 緊急連絡先（病院等）
- 最寄りの医療機関の場所、ルート
- 安全管理者とその役割
- 天候等による作業中断の目安
- 応急手当等の具体方法　等

④スタッフミーティング

企画運営者、当日のスタッフで、当日スケジュール、役割分担、危険箇所等、緊急対応方法などは共有しておく。文字だけの資料ではなく、写真や地図などを活用し、できるだけわかりやすい方法をとる。

⑤保険への加入

活動中におこる様々な事故から参加者を守り、安心して活動を行うことができるように、事前にボランティア保険へ加入するのが望ましい。降雪環境では、疾病が誘発されることも多いので、生命保険への加入の検討も考えられる（学生、未就労者などは、生命保険に加入してない場合がある）。

そのほか、器物損壊など参加者の引き起こした損害や参加者自身のケガや疾病等に対応するため、募集者が事業者保険に入ることもあわせて検討する。

【参考情報】

平成１８年度版ふくしの保険ホームページ http://www.fukushihoken.co.jp/pamphlet/shakyou.pdf

⑥地域住民等の対応確認

除雪ボランティア活動には、できるかぎり地域住民の参加・協力の必要がある。地域住民の協力なくしては、除雪ボランティア活動はできない。参加を呼びかける際は、地域住民の役割も明確にしておくと、参加しやすいと思われる。「ボランティア」という言葉にすらなじみのない地域もあるため、十分に説明をしておくことが望まれる。

安全衛生の面から考えても、地域の実情を把握しているのとしていないのとでは大きく違ってくる。地域住民を通じた情報収集なくしては、リスクの把握から対処まで企画運営者の負担も大きくなってしまう。

写真：当日参加した地域住民

（５）当日活動前（オリエンテーション）

【チェック項目】

- □ 装備や天候の再確認
- □ 健康状態のチェック
- □ 活動環境の説明（危険箇所の説明）
- □ けが、体調が悪くなった場合の対処方法
- □ リーダー、安全管理者の確認
- □ 準備運動

①装備や天候の再確認

活動に入る前にその日の天候を確認し、装備・用具を再検討します。出発時の気温が高くても、活動現場と温度差がある場合もあるため、防寒具、着替えは忘れずに持って行くのが望ましい。

降雪環境では突風や落雷に留意し、活動中でも気温と天候の変化には、特に敏感になった方がよい。急変した場合の対応についてもオリエンテーション時に参加者全員に周知をしておくことが望まれる。

②健康状態のチェック

できるかぎり、健康状態のチェックをするのが望ましい。事前にチェックすることで、自らの健康状態に意識することになる。これによって、自分の年齢、体力、健康状態への過信による過度の作業を抑制することができる。

過去の災害ボランティア活動の事例では、自らの健康状態を意識するために血圧を測定する場所を設けたケースもあった。

これは除雪ボランティアだけでなく、地域住民も一緒にすることが望ましい。

参考「災害ボランティアの安全衛生対策マニュアル ＶＥＲ４.１」
（www.rescuenow.net/other/anzen_manual_ver4.pdf）

③活動環境の確認（危険箇所の説明）

オリエンテーション時には活動環境（作業をする場所等）について下記のようなリストを参考にして、詳しく説明をする時間を設けることが望まれる。事前の下見等で記録した写真などを見せながら、説明するとわかりやすく、伝わりやすい。

- 屋根からの落雪
- 雪庇（せっぴ）：軒先から雪がせり出ている状態
- つらら：重量のある氷の塊
- 庇（ひさし）の下
- ガスの配管
- 側溝・水路とその深さ、流水状況
- 路面の状況
- 狭い道幅
- 道路横断などの留意点
- 視界や足下が悪い場合（路肩に溜まった雪等）
- 除雪車・小型除雪機械　　等

④リーダー、安全管理者の確認

活動のためのオリエンテーション（事前説明）を聞き、留意すべき事や心得を理解し、それを実践するように心掛ける。

安全な活動の確保（天候の変化への対応、ケガや病気の際の対処など）のために、グループ毎に１名、状況を判断する役割の人（リーダー）を決め、グループ以外の方にも知らせるようにする。リーダーとは別に、メンバーの安全な活動を見守る役割（安全管理者）を置くこともよい。

緊急時の連絡先や連絡方法などを盛り込んだ対応要領を、あらかじめ定めておき、その内容をカードにまとめてオリエンテーション時に参加者に配布するやり方もある。また、活動における心得を再確認することが求められる。特に寒冷環境に慣れていない方は、自分が寒冷環境に対して素人であることを自覚することが、事故の防止につながる。

⑥準備運動

外に出た直後はすぐに激しい活動をせずに、必ず、準備運動を十分に行ったほうがよい。(急激な気温の変化に体を対応させるため)。運動量が少ない活動の場合でも行うのが望ましい。

寒いと筋肉、関節、腱が硬くなるため、首、手首、足首、股関節、腰等を動かす。

（６）活動中

【チェック項目】

- □ 現地への移動
- □ 人数の確認
- □ 時間の管理と適切な休憩
- □ 適切な食事
- □ 水分とミネラルの補給
- □ そのほかの留意点

①現地への移動

暖かい室内から寒冷な室外に出るときは、急激な温度変化から身体を守るために、その日の現地の状況に適した装備であるかを確認する。また、寒冷環境下では、転倒の危険性があるため、路面の凍結などに注意する。

②人数の確認

活動開始直前、終了後、そのた休憩時など活動の区切には、常にグループの人数がそろっていることを確認する。

③時間の管理と適切な休憩

身体への影響を考えると、作業を一定時間以上続けることは避けたほうがよい。例えば、１時間に１５分程度は休憩をとるようにしたり、疲労度に応じてさらに休憩時間を延長したり休憩回数を増やすようにするのがよい。

自分の体力を過信せずに、声を掛け合って、きちんと休憩を取ることが大切であり、このため、交代で休んでいる方が、タイムキーパー役を行うことも考えられる。

また、休憩場所は、みんなで使う場所なので常に整理、整頓、清潔を保つようにする。

１日の活動時間は１時間の昼食休憩を含めて６時間以内を目安とする例もある。明るいうちに戻れるように、時間に余裕を持って活動を切り上げる（日没後は急速に気温が下がること、視野が悪くなること、道路が凍結する可能性もあること等が考えられる）。

④適切な食事

寒冷環境下における作業は､多くのエネルギーを必要とするため､食事は非常に重要である。朝食は、必ず活動前に摂り、昼食も抜かず、食事抜きで活動することのないようにするのがよい。可能であれば、食べ物は余分に持って行くことが望ましい。

持参した食事は、温かい場所におくと痛む場合がありますので、清潔で冷涼な場所に保管するのがよい。

⑤水分とミネラルの補給

脱水症の防止のためにも、食事の際に、水分とミネラルをキチンととったほうがよい。

寒冷環境下では、脱水症状が進行しやすくなる。このため、休憩のたびに水分とミネラルを適量とるようにする。水分をとる際には暖かいものが望ましいです。濃いお茶やコーヒー、ビール等は、利尿作用があるカフェインやアルコールが含まれているため不適である。

ペットボトルの飲料をそのまま配るのではなく、少量を数回にわけて取るために、紙コップを配布する方法も考えられる。

⑥そのほかの留意点

トイレを我慢するのは健康リスクを高めてしまうため、できるだけ休憩中などトイレに行くように呼びかける。

休憩は、原則として暖房された室内でとるのが望ましい。休憩場所に体温計や血圧計があれば測定し、自分の健康状態を客観的に確認するのもよい。

活動中、ケガや病気を発生しないように予防を心がける。特に、気温によって氷や雪の状況は大きく異なる。気象情報や天候の変化には十分に注意する必要があり、警報などが発表された場合には、活動を中止するのがよい。

・

お互いに体調や行動の確認を行うことができるように、活動中や移動する際は、基本的に２人以上で行動するように「ペア」をつくっておくのもひとつの方法である。

ボランティア活動に没頭するあまり、自己の体調の変化に気づかないことがある。天候など周囲の環境のささいな変化にも留意することがよい。状況変化に応じて、作業を中止することは、現地に余分な負担をかけないためにも必要なことといえる。

活動中に体調の不調を感じたときは、ただちに活動を中止し、リーダーに報告します。その後、すみやかに活動から離れて医師や看護師の診察を受けるようにする。また、活動中にけがをした場合も、傷口の消毒や手当は迅速に行う。また、ボランティア活動後、帰宅してから身体に異常を感じた場合は、医師の診察を受けるようにする。

参考：寒冷環境下での作業における身体への影響を考慮した注意事項について

寒冷環境下で体を動かす場合（移動も含め）、下記の点に注意が必要となります。

［作業前］

・ 寒さは、血管を収縮させるので血圧が上がってしまいます。作業の前に、防寒着などを着用するなどして、できるだけ**温度の変化が少なくなるような工夫**をしましょう。また、マスクをするなど**冷たい空気を吸い込むこと**がないような工夫をしましょう。
・ 起床してすぐに雪かきをするのは身体に良くありません。作業の前に**体操をする**などして身体を慣らしてから行うようにしましょう。
・ 作業中は多量の汗をかくことがありますので、適宜、スポーツ飲料などを飲んで**水分とミ**

ネラル[5]を補給しておくことが重要です。

［作業中］

・ 湿った重い雪の雪かきは、大変な重労働です。特に力んだりすると血圧と脈拍が上がります。血圧が高い方や心臓が悪い方などは、無理な作業はしないようにしましょう。また、重い雪により足腰を痛めたりすることもあるので、足腰に負担にならないよう注意して作業をしましょう（正しい作業姿勢、腰痛予防ベルトの装着など）。

・ 身体に過大な負荷がかからないように、少なくとも１時間に１５分程度は休憩をとりながら作業をしましょう。

・ 作業中は、多量の汗をかくことがありますので、体温の調節と水分管理に注意しましょう。

［雪かき作業後］

・ 作業が終わったら、スポーツ飲料などを飲んで水分とミネラルを補給しましょう。身体の水分が少なく（脱水症状に）なると血液の流れが悪くなり、脳梗塞や心筋梗塞の原因となる場合があります。

・ 作業が終わったら、すぐに汗を拭き取り、乾いた衣類に着替えましょう。汗に濡れた衣服を着たままでいると体温が奪われ、体調を崩す場合があります。

http://info.pref.fukui.jp/kikitaisaku/touki051226-02.pdf　等を参考に作成

[5] ナトリウム、カリウムなど身体が必要とするイオン（電解質）。市販のスポーツドリンクやアルカリイオン飲料を数倍に薄めたものや、家庭等でつくられるレモネードに塩少々をいれたものでも摂取できます。

（７）活動後

【チェック項目】

- □ 衛生管理･留意点
- □ クールダウン
- □ 今後の活動について

①衛生管理・留意点

活動終了後は、必ず手洗い、うがいをするのが一般的です。

作業後は、必ず肌着を着替るように呼びかける。着替える際は必ず暖かい部屋の中で行う。汗をかいてないようでも衣服のなかに大量の湿気を溜めているためである。この湿気が体を冷やし健康を害する。

また、活動後も水分とミネラルを適宜補給する。

作業直後の入浴は、心臓や血管に負担がかかるため避けたほうがよいので、そのことも説明しておくとよい。脱衣・入浴は、身体に急激な温度変化が生じないように注意が必要。（脱衣場とお風呂場はあらかじめ暖めておくとよい。）

また、感染症などの場合、すぐに症状が出ない場合がある。ボランティア活動後、体調に変化があった場合は速やかに病院に行き、医師の診断を受ける必要がある。

②クールダウン

一日の活動でもストレスによる心身の変調が起こる場合がある。災害ボランティア活動の場合、ストレスによるボランティアの体調悪化などもみられており、除雪ボランティア活動においてもストレスによる心身の変調は想定される。

活動においては、ふだん接しない人と接することもあるため、気がつかないうちにストレスが溜まっている場合がある。本人はストレスに気づかないことが多いので、「自分だけは大丈夫」と過信してはならない。

ストレスにはいろいろな種類があり、それぞれの症状について知っていることがストレスへの対処に役に立つ。作業中に気分が悪くなるなど症状が出た場合は、作業を中断するのがよい。また、作業後、該当する症状が出た場合は専門医の診察を受けるのがよい。

（参考）ストレスの症状として考えられるもの

以下の症状が５～６項目以上ある場合は注意が必要である。

- ケガや病気になりやすい
- 何をしても面白くない
- 不安がある
- 状況判断や意志決定にミスをする
- じっとしていられない
- 人と付き合いたくない
- いらいらする
- 物事に集中できない
- すぐ腹が立ち、人を責めたくなる
- 物忘れがひどい
- 問題があるとわかりながら考えない
- 気分が落ち込む
- よく眠れない
- 頭痛がする／発疹が出る

出典：平成１０年『赤十字防災ボランティアコーディネートマニュアル』　日本赤十字社

（参考）数日以上、ボランティア活動をした場合に陥りやすい症状

“私だけができる”症候群	自分が万能になったような気分になり、八面六臂の活躍をするが、自分しかできないと思い込み、休みなく働きつづけたり、人に任せることができなくなってしまう。
燃え尽き症候群（burn out）	その人の能力や適応力のすべてを使い果たした極度の疲弊状態をいい、仕事から逃避したり、酒におぼれたり、逆に仕事に没頭したりする。また同僚や被災者につらく当ったり、冷笑的になったりする。
被災者離れ困難症	はじめは被災者から感謝され、ボランティアは満足感を得るが、やがで被災者が自立できるようになり、援助の必要が減少すると、感謝されなくなり、自分が拒否され、不適格になったような気持ちに陥る。
“元に戻れない”症候群	日常生活に復帰したときに自分の居場所を失ったような疎外感を感じたり、自分の衝撃的で貴重な体験が評価されず失望や怒りを感じたり、まだ終わったような気がせず、平凡な日常の仕事ができなかったり、いらいらすることをいう。

出典：平成１０年『赤十字防災ボランティアコーディネートマニュアル』　日本赤十字社

参考：ボランティアのクーリングダウン（Cooling down）

いきなり被災地からもとの生活に帰してしまうと、ボランティア自身が傷ついてしまうのです。バーンアウト（Burn out）といいますが、被災地での生活を体験して感情的に高揚した状態から、急にあたり前の日常に戻ると、まわりの人がとても小市民的に見える。とてもずるいように見えることがよくあります。もっとはっきりいえば、自分だけが周囲から浮いてしまった状態になってしまうのです。そうなると、今度はその人が周囲の人たちと問題を起こし、まわりから弾き飛ばされてしまう危険があります。ですから、基本的には被害地の現実から日常の現実へゆっくりと移行させいていく必要があります。これをクーリングダウンといいます。

出典：『率先市民主義　防災ボランティア論　講義ノート』林春男

③今後の活動について

当日の活動が終わっただけで、安全衛生面の配慮は終わりにならない。一度ボランティア活動をした人は、また機会があれば積極的に参加する可能性が高くなる。

「雪かき道場」のようにある程度の安全衛生面に配慮したケースを経験すると、どこの現場に行っても同じように配慮されているととらえてしまう可能性もある。一般的な地域住民が普段から行っている雪かき・除雪では、安全衛生面の配慮が十分にされているとはいえないことも伝えておく必要がある。(できれば、地域住民の除雪作業も安全衛生面の配慮をするのが望ましいが)

そのため、当日と同じような状況がどこでもあるわけではないことをきちんと伝えておく必要がある。また、少人数（５名未満）の活動の場合は、安全衛生の配慮が難しくなるため、あまりおすすめできないと思われる。

これはスコップやスノーダンプを使った作業に限らず、ホイールローダーや除雪機などの小型建機についても同様のことがいえる。

免許があれば、自由に使えるのではなく、作業環境が整備されていて、専門の管理者（責任者）がいなければ使うことができないことを説明する必要がある。(上級車編では十分な説明ができていなかった)

Ⅳ．今後の課題・展望

１　継続的な取り組みと情報共有の重要性

本調査では、除雪ボランティア活動における安全衛生について、リスクとその対処について整理を試みた。

除雪ボランティア活動の実態については、十分明らかになっている状況ではなく、現在は発展段階にあるものと思われる。そのため、地域の実情にあわせ、今後も安全衛生面に配慮した取り組みが継続されることが望まれる。

また、各地での実例情報を企画運営者が共有することで、隠れた知恵や工夫が活用され、費とがること、新たな知恵や工夫が生まれることが期待される。これは一部の企画運営者でつくるのではなく、参加した除雪ボランティアも一緒になってつくっていくことがよいであろう。

「継続的な取り組み」と「情報共有」を充実させていくためにも、４つの取り組みが進められることに期待したい。

- リスクを学ぶコンテンツ・プログラムづくり
- 安全衛生講習の実施
- コンパクトな資料づくり
- 雪かき道場総合サイトの構築

（１）リスクを学ぶコンテンツ・プログラムづくり

除雪ボランティア活動において、「危ない」「危険」というだけで、活動を抑制するのは望ましいとはいえない。正しくリスクを理解することがなにより、安全衛生の確保、けがや疾病のないボランティアの活動環境につながると考えられる。

現時点では各地での取り組みも模索段階であるが、質の高いリスクを学ぶコンテンツやプログラムの開発が求められる。

たとえば、雪庇や屋根雪の落雪、その破壊力や影響する広さなどを映像としてとりまとめ、活用されることなどが考えられる。除雪作業を目的とするのではなく、除雪中のリスクを知ってもらうコンテンツやプログラムをつくることを目的にして、ボランティアと地域住民が一緒につくる企画というのもあるのではないだろうか。

（２）安全衛生講習の実施

今回の現地調査では、あまり雪がつもっていなかったこともあり、十分に除雪環境を把握することができなかった。まだまだ各地で安全衛生に関して配慮すべき点や工夫などはあることと思われる。

新たな「安全衛生」の配慮面を明らかにしていくこと、新たな知恵、工夫を生み出す場として、安全衛生に特化した講習会の実施が望まれる。

この講習会では、調査結果などをもとにしたテキストを作成し、安全衛生の考え方や基礎的な知識をつける座学と、実際に現場での作業や多くの活動現場を視察することで、再度調査結果の検証、現場での対応方法などを考える機会を設けることなどが考えられる。

こうした講習会を開催し、参加者同士の交流ができれば、除雪ボランティア活動が必要になったときの支援が可能になり、地域間支援体制の構築にも寄与できるものと思われる。

（３）コンパクトな資料づくり

除雪ボランティア活動におけるリスクやその回避に関する情報は非常にたくさんある。とても一個人だけで対処できるものではない。また、大量の情報を集中的にボランティアに提供しても、十分な理解が得られるとは考えられない。そのため、コンパクトなわかりやすい資料づくりが必要になると思われる。

水害現場でのボランティア活動が少しでも安全にかつ円滑に進むよう、過去の事例等を参考にコンパクトなマニュアル資料が作成された。

このような例も参考にしながら、ボランティアが使いやすい資料づくりが進むことが期待される。

参考　「水害ボランティア作業マニュアル」

1.　仕様　　A4 両面カラー／水にも強い紙を使用

　　サンプル　http://rsy-nagoya.com/rsy/suigai-manual.html

2.　発行　　（特）レスキューストックヤード、日本財団

　　協力　　全社協・全国ボランティア活動振興センター

（４）雪かき道場総合サイトの構築

（１）～（３）の情報、各地での除雪ボランティア活動をとりまとめた「総合ウエブサイト」が構築されれば、除雪ボランティア活動に関する安全衛生も充実することになる。

具体的な配慮事例や除雪ボランティア活動の参加者などによる「ヒヤリ・ハット集」など、紹介することで、情報共有をはかることが望まれる。